ドストエフスキイ研究会便り（11）

カラマーゾフの世界　　ー スメルジャコフを巡る人々ー

（4）. 噛み砕かれたアリョーシャの指

はじめに

我々が今まで検討してきたスメルジャコフとイワン、そして次回に取り上げるドミートリイなど、その内に脈打つカラマーゾフ的生命力を激しく生きる他の兄弟たちと較べて、主人公の末弟アリョーシャはもの静かで穏やかな信と愛の人であり、他人を批判したり裁いたりすることはまず滅多にない。この青年のことを中性的で生彩がないと評する読者や評者も少なくない。だがそうであろうか。本章はこの物静かな信と愛の人が持つ「強さ」を追ってみたい。

信と愛の人アリョーシャが持つ強さ。このことが最もよく現われ出るのは、まずは作品の始めに紹介される彼の出家を巡る顛末である（一４）。「俗世の憎悪の闇から愛の光に向かって身を引き剝(は)がそうと」しての出家。その際青年アリョーシャが示す「一切か無か」の烈しい絶対排中律の精神は、我々読者の精神を揺さぶらずにはいない。作者ドストエフスキイはこの青年の烈しい求道精神を、ゾシマ長老との出会いを介し、遥か遠く福音書における十字架上のイエスに連なる精神として位置づけ、更にそれを「キリストの愛」「実行的な愛」、あるいは「一本の葱」と呼ぶ。この作品を根底で貫く強靭な精神である（2・4）。

アリョーシャの「実行的な愛」が持つ強さ。それはイリューシン少年の苦しみに寄り添うアリョーシャの姿の内に具体的かつ明瞭に認められるであろう（1・3・5）。そしてこの作品の終局に描かれるアリョーシャの「告別説教」（6）―― 亡きイリューシンの石の前で少年たちに「素晴らしい永遠の思い出」を説く彼の言葉と、それに応える少年たちの「カラマーゾフ、万歳(ウラー)！」の叫び。この誰もが胸を打たれる感動的な「告別説教」の背後には、「実行的な愛」の人アリョーシャその人が存在し、更には彼の魂を襲った「激震」が隠されている。この時アリョーシャが念頭に置くのは、「ジューチカ事件」や「垢すりへちま事件」等の悪魔的悲劇的な事件を通して自らを地獄に追い込み、また追い込まれたイリューシン少年の絶望と苦悩であり、またここにはイリューシン父子の苦しみを引き起こしたドミートリイとスメルジャコフの罪を誤魔化さず見据え、今は「死の床」に沈むイワンを見守るアリョーシャの厳しく愛情に満ちた眼も確認されるであろう。

この青年から我々が指し示されるのは、「罪なくして涙する幼な子」という『カラマーゾフの兄弟』の根底に存在する通奏低音であり、そこから響いてくるのは、運命の理不尽と残酷さの内に放り投げられたイリューシンとスメルジャコフに向ける、アリョーシャの「実行的な愛」とその強さである。

第4章. 噛み砕かれたアリョーシャの指　　[第四章3より]

目次　　**[ページ]**

1. アリョーシャを狙って　―「これで十分だね？」―　２～４
2. イワンからアリョーシャへ　―「罪なくして涙する幼な子」への眼　―　４～１２
3.「垢すりへちま事件」　― 父と子の受難 ―　１２～１９
4.「平等」であること　― アリョーシャとリーザが担う使命 ―　２０～２４
5.「ジューチカ事件」　― イリューシンとスメルジャコフ ―　２４～３６
6. アリョーシャの告別説教　― 死からの復活の条件 ―　３６～４３

1.アリョーシャを狙って　―「これで十分だね？」―

投石合戦

アリョーシャがホフラコワ夫人宅に向かう途上のことである。掘割を隔てて、下校途上の少年六人と一人が睨み合っている。一人だけ向こう側に立つ少年はどうやら十歳にも届かず、青白く病気持ちのようだ。アリョーシャが少年の集団に話しかけると、対岸から石が飛んでくる。少年たちの一人が投げ返すや、直ちにまたも対岸から石が飛び、今度はアリョーシャの肩をしたたかに撃つ。向こうの少年のポケットには石が一杯に詰め込まれているらしい。

> 「あれは、あんたを狙ったんだよ。あんたをね。わざとあんな風にぶつけたんだよ。だって、あんたはカラマーゾフ、カラマーゾフでしょう？」(四３)

一斉に投石合戦が開始される。対岸の少年の頭に一つが命中し、少年は一瞬倒れるが直ちに跳ね起き、狂ったように応戦してくる。少年たちを制止するアリョーシャの背に再び石が当たる。やはり向こうの少年は石を沢山持っていて、その石を少年たちだけではなく、アリョーシャも狙って投げているらしい。夢中で石を投げ返す少年たちが上げる叫びから、アリョーシャには幾つかのことが明らかになる。まず掘割の向こうの少年がこの日学校で、少年たちの仲間のコーリャ・クラーソトキンをペン・ナイフで突き刺し、血を流させたこと。次にこの少年がアリョーシャを知っていて、石をぶつけようとしていること。そしてその理由はこの少年に、「ぼろの垢すりへちまを好きか？」と聞きさえすれば分かること。

投石合戦は一段落する。アリョーシャは少年たちを残し、掘割の向こうにいる少年を目指して橋を渡ってゆくのだった。

「これで十分だね？」

少年は、向こう側の掘割に沿った坂の上に立ち、身動きもせずに待ち構えていた。やはり年齢はせいぜい九歳ほど、痩せて細長い顔は青白く、背の低い虚弱そうな少年だった。アリョーシャを睨みつける黒い目には敵意がこもっている。相当古ぼけた外套からは不格好に身体がはみ出し、両袖からは手が剥き出しになっている。ズボンの右膝には大きな継ぎが当てられ、右の長靴は爪先の親指の辺りに大きな穴が空き、そこにはたっぷりとインクが塗られているようだ。外套の膨らんだ両ポケットには案の定、石が詰め込まれていた。

アリョーシャの目から、彼が殴る気持ちがないことを知ると、少年は口を開いた。「こっちは一人なのに、あいつらは六人なんだ・・・僕一人でみんなやっつけてやる」。「でも石が一つ、ひどく当たったね」。「僕だって、スムーロフの頭にぶつけてやったよ！」。「あの子たちが言っていたよ。君は僕を知っていて、何か訳があって石をぶつけたんだってね？[略] 僕は君を知らないけれど、本当に君は僕を知っているのかい？」。

筆者も記すように、どんな幼い子供たちに対しても、隔てなく自然に語りかける天性に恵まれたのがアリョーシャである。だが少年は、このアリョーシャから発せられる穏やかな問いにも一切取り付く島を見せない。その場を去りかけるアリョーシャの背後から、またもや大きな石が投げつけられ、その背をしたたかに撃つ。「君は、後ろから狙うのかい？」。逆上した少年は、今度は正面からアリョーシャ目がけて石を投げつけてくる。だがこの石は身構えたアリョーシャの肘に当たっただけであった。

「よくも恥ずかしくないね！ 僕が君に何をしたんだい？」(四３)

相手が飛び掛かってくるものと待ち受けていた少年は、その気配がないのを察すると突然野獣のようにいきり立ち、逆にアリョーシャを目がけて飛び掛かり、頭を下げて相手の左手を掴むや、その中指に噛みつき、歯を立てたまま十秒ほど離そうとしない。アリョーシャが悲鳴を上げ、力任せに指を振り払おうとすると、少年はようやく噛みついた指を離し、前と同じ距離まで飛び退くのだった。指は爪のつけ根あたりを骨に達するほどまでにしたたかに噛まれ、血が流れ出ていた。アリョーシャはハンカチを取り出し、傷ついた指を固く結びにかかったが、結び終わるのにたっぷり一分ほどが必要であった。少年はそこに突っ立ったまま待っている。

アリョーシャは穏やかな眼差しを少年に向け、語り掛けるのだった。

「さあ、これでいい。見てごらんよ、ひどく噛んだね。さあ、これで十分だね？
じゃ今度は教えてくれるね。僕は君に何をしたんだい？」(同上)

驚いて見つめる少年に向かい、アリョーシャが再び穏やかに自分が何をしたのか問うた時である。少年は突然大声で泣き出し、その場から走り去ろうとするのだった。その後からゆっくりと随いてゆくアリョーシャを少年は決して振り返らず、速度を速めることもせ

ず、緩めることもせず、恐らくは大きな声で泣き続けたままであろう、遠くに走り去ってゆく。その姿を見守りながら、アリョーシャは堅く心に誓うのだった。あの少年を探し出し、自分の心を震撼させた謎を明らかにしなければならない。

2. イワンからアリョーシャへ　―「罪なくして涙する幼な子」への眼 ―

イワンからアリョーシャへ

「さあ、これで十分だね？」。骨にまで達する噛み傷から流れ出る血を示しながら、穏やかな眼差しでアリョーシャが少年に語りかけたこの言葉こそ、アリョーシャという存在の一切を雄弁に物語る言葉と言えよう。結論の先取りのようになるが、これは彼一人の言葉に留まらず、ゾシマ長老と十字架のイエスを背後に置いて、運命への呪いと復讐心に捕えられた不幸な存在に向かって発される言葉、『カラマーゾフの兄弟』全篇を支える土台石とさえ言うべき言葉であろう。

イワンが「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」を以って指し示すのは、世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちの存在である。そして我々が繰り返し確認してきたように、この青年の異母兄弟であり下男であるスメルジャコフこそ、イワンが直接家畜追込町の現実の中で直面した「罪なくして涙する幼な子」に他ならない。だがスメルジャコフを前にしたイワンは、出会い当初に掻き立てられた強い関心にもかかわらず、この異母兄弟の悲劇性をも悪魔性をも受け止めることが出来ず、相手の内に「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を見出すや、「嫌悪感」と共に冷たく距離を置くことになってしまったのだ（「研究会便り（９）6」、「同（１０）3（２）」）。イワンに代って、スメルジャコフの悲劇性と悪魔性の前に正面から立つのがアリョーシャである。そして新たにもう一人、イリューシンという「罪なくして涙する幼な子」が登場し、これから見てゆくように、この少年に対してもアリョーシャは正面から向き合うのである。

「神殺し」と「イエス磔殺」、そして「父親殺し」と「兄弟殺し」。これら何重にもわたる罪を犯した末に人格を崩壊させ、遂には「死の床」に沈むイワン。作者ドストエフスキイがこの青年を、やがてその罪の赦しと復活の光の中に起ち上がらせるであろうことは、前回の終わり、アリョーシャの祈りとドミートリイの予言を通して確認した(第３章6、「研究会便り（10)」)。だが「死の床」から起こされた後にイワンが生きるであろう生を、既に前篇、家畜追込町の現実において日々生きるのが弟のアリョーシャに他ならない。今見たイリューシン少年とのやり取りから明らかなように、ドストエフスキイはこの青年アリョーシャを、「罪なくして涙する幼な子」に対する「実行的な愛」の人として提示し、この作品の中心的骨格・対立軸を構成したと考えられるのである。

だがこのような使命を担う主人公を、ドストエフスキイは具体的に如何なる人間として造型しているのか。つまりアリョーシャの成長史と精神史的背景を如何なるものとして提

示しているのか。今まで我々は、作者が次々と提示するスメルジャコフの出生やその後の様々なエピソードを検討し（第１・２章)、またイワンのモスクワにおける精神史も検討し（第３章)、その上で二人の家畜追込町における出会いから対決に至るドラマを検討してきた。同様にアリョーシャについても、本章ではまずドストエフスキイが提示する基本的情報を整理し、その上で改めてイリューシン少年との交流を辿り、そこから如何なる「実行的な愛」の人アリョーシャ像が浮かび上がるか追っておこう。その過程で、アリョーシャが命を預けた師・ゾシマ長老の思想の核心も浮かび上がるよう努めたい。

アリョーシャの天性

まず注目すべきは、小説が始まったばかりの第一篇である。作者ドストエフスキイは、この物語の語り手たる筆者に、アリョーシャの人生の出発点のことを丁寧に描き起こさせているのだ。その要点をまずは確認しておこう(詳しくは、拙著『カラマーゾフの兄弟論 ― 砕かれし魂の記録 ―』Ⅲ２・３、「研究会便り（３）Ⅰ」を参照)。

筆者は兄のイワンが、既に十歳の頃から自分が他人の世話になっていることを苦にし、このことが大学時代まで尾を引き、その思想形成に少なからぬ影響を及ぼしたと指摘する（一３)。これとは対照的に、弟のアリョーシャの方は「自分が誰の金で暮らしているのか、一度として心を配ったことがなかった」とされる。筆者は更に地主のミウーソフに、この青年が見知らぬ大都会に無一文で投げ出されたとしても、誰かが見捨ててはおかず、決して飢えさせることも凍えさせることもしない「世界でただ一人の人間」であろうと語らせ、この青年に関しては、生活のための苦しみということがそもそも問題として成立しない稀有な存在であるとまで言い切らせるのである（一４）。またこの青年は決して他人を裁いたり批判したりすることがなく、「一切を赦しているように思われる」とされることにも注意すべきであろう。実際アリョーシャが故郷に現れるや、「好色漢」で「卑劣漢」で、また瀆神的「道化」の雄である父親のフョードルでさえ、二週間も経たぬ内に、息子に対して心底愛情を抱くようになったとされるのだ（同上)。このように冒頭から主人公のアリョーシャ像は、「明日(あす)のことを思(おも)ひ煩(わずら)ふ」（マタイ六２５） ことのない「幼な子」（同十八1-5）、あるいは「宗教的痴愚(ユローチヴィイ)」の魂を持つ「天使」のような存在として刻まれるのである。

「ロシアの小僧っ子」アリョーシャ

アリョーシャが帯びる深い宗教性について、筆者はこれを正面から取り上げ、彼が「根本的ないわば自然発生的な信」の人であり、また「生来誠実で、真理(プラヴダ)を求め信じる人間」であると規定する。また筆者はアリョーシャがひとたび真理を信じるや、そのための「勲功(いさおし)」を成し遂げるべく、厭わず「全てを、命さえをも犠牲に捧げる」ような「現代青年」であること、そしてこの真理探究に燃える青年が、「神と不死」を求めて「出家」さえ決心したことを告げる。注目すべきことは、アリョーシャの出家の動機がほぼ同じ表現で二度にわたって記され、読者に注意が促されることだ。

「その時、そのことだけが彼に感動を与え、俗世の憎悪の闇から愛の光に向かって身を引き剝がそうとしていた彼の魂の、いわば究極の理想と思えたからである」（一４，５）

アリョーシャとは「俗世の憎悪の闇」から「愛の光」に向かおうと切望する若者、そのためには「命を投げ出す」ことをも厭わず、出家を「究極の理想」とさえ考える真摯な十九世紀ロシアの求道青年、つまりは「ロシアの小僧っ子」だとされるのである。

イエスの呼び声

殊に注目すべきことは筆者が、「ロシアの小僧っ子」アリョーシャの出家の動機を、イエス・キリストの呼び声に応えたものとすることだ。つまり筆者はまず「真理」を求める青年アリョーシャが、「真剣に思いを巡らせた」末に「不死と神とは存在する」という確信に到って「愕然」とし、「自分は不死のために生きよう、中途半端な妥協は受け入れられない」と自らに言い聞かせたと記す。次いで筆者は、この「不死と神」の問題に対するアリョーシャの姿勢が「一切か無か」の厳しい排中律の姿勢であったこと、それがイエス・キリストを向こうに置いてなされた不退転の決意に基づくものであったことを示すべく、この青年が次のようなイエスの言葉と出会ったと記すのである（この言葉の出典の問題については、拙著『カラマーゾフの兄弟論 ― 砕かれし魂の記録 ―』Ⅲ２、「研究会便り（３）Ⅰ」を参照）。

「なんぢ若し全からんと思はば、一切を分ち與へよ，かつ來りて我に從へ」（一５）

青年はこのイエスの言葉と向き合い、次のように自らに言い聞かせたとされる。

「《一切》の代わりに二ルーブリを与えて誤魔化したり、《我に從へ》の代わりに礼拝式に通うだけにしたりすることなど、僕には出来ない」（一５）

イエスの言葉と向き合うアリョーシャは、更に次のような問いを自らに投げかけ、ただその確認のためだけに故郷に向かった可能性もあると記される。

「そこでは《一切》［を与えているの］か、それともそこでも《二ルーブリ》［しか与えていないの］か？」（一５）

「ただ然り然り、否否といへ、之に過るは悪より出づるなり」（マタイ五 37）。絶対の排中律、二者択一の厳しい選択を迫るイエス・キリストに応え、神の前に「全からん」人間となるべく、アリョーシャはモスクワを去り、「そこ」つまり故郷の家畜追込町に向かい、

遂にはこの町の郊外にある修道院で禁欲と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守り続けるゾシマ長老と出会うのである。以上の情報だけでも既に、ドストエフスキイ文学の中で稀有とも言うべき一青年の成長史が、つまり「神と不死」を求める真摯な求道青年、「ロシアの小僧っ子」誕生の、コンパクトではあるが見事な精神史が提示されたと言えるであろう。ここにあるのは、決して中性的で生彩のない青年像などではない。

帰郷、母の墓探し、アリョーシャの精神の根

ところでアリョーシャが帰郷を思い立った直接の動機について、筆者はそれが母の墓探しであったと記す。アリョーシャの心には、彼が二歳の頃のある思い出が強く焼き付けられていたのだ —— 静かな夏のある夕方、沈みかけた太陽の斜光が射し込む中、灯明の灯る祭壇の聖母像の前に跪いた母が、幼いアリョーシャを両腕で強く抱きしめ、ヒステリーを起こしたかのように泣きじゃくり、叫び声を上げながら聖母マリアに祈っている。「狐憑き（クリクーシカ）」と呼ばれる母は聖母の庇護を求めるかのように、両手で抱きしめた息子を聖像の方に差し伸べる。そこへ突然乳母が飛び込んできて、怯えたようにアリョーシャを母からもぎ放してしまう（一４）。

彼に帰郷を促した直接の動機がこの母の墓探しであったことも、我々には十分に納得出来るものである。だがこの青年は、生前の母を愛してくれた下男グレゴーリイの導きで墓を探り当てた後は、墓にも母にもそれ以上の関心を示した形跡はない。作品の冒頭で筆者が刻もうとしたのは、アリョーシャの母の墓探しそのものというよりは、主人公が宗教的痴愚の母から聖母マリアとイエス・キリストに捧げられた存在であるという事実であり、つまり筆者はこの求道青年誕生の背後にある宗教的奥行きを提示しようとしたのだと考える方が真実に近いのではあるまいか。実際彼は、この母の祈りと導きにより、故郷で「キリストの御姿」を守るゾシマ長老と出会うに至ったと言えるのだ。

再度確認しておこう。「根本的ないわば自然発生的な信」の人アリョーシャが、成長と共にイエスの呼び声に応え、「一切か無か」の精神を以って「神と不死」探求の旅に乗り出すドラマとは、聖母マリアを熱烈に信奉する母に導かれ、その墓探しのために訪れた故郷の修道院で「キリストの御姿」を守るゾシマ長老と出会い、その導きの下で「実行的な愛」の道に乗り出すという、母の祈りの実現のドラマでもあると言えよう。我々はここに「ロシアの小僧っ子」アリョーシャ、信と愛の人アリョーシャ誕生の大きな流れを読み取り、またそこに作者ドストエフスキイが込めた熱い思いをも感じ取りたい。

ゾシマの兄マルケルとアリョーシャ

アリョーシャの人生における決定的な出来事、つまり帰郷によるゾシマ長老との出会いの後、一年にわたりこの青年が育んだ師に対する信と愛、「初恋とも似た」と記される長老への熱烈な傾倒ぶりについて（一４）、そして長老の死と死臭の発生が彼に及ぼした衝撃（七１,２）、更にはその後彼に与えられた宗教体験については（七３，４）、ここで詳しく扱う余裕（スペース）

がない（拙著『カラマーゾフの兄弟論』後篇ⅦＡを参照）。我々はここでは逆に、ゾシマ長老その人がアリョーシャをどのように受け止めていたか、この視点について確認しておこう。このことで、ドストエフスキイがアリョーシャを置いた精神史的文脈が改めて明らかとなり、我々はより一歩明瞭なアリョーシャ像に近づけ、同時にゾシマ長老の思想の核心に一部でも触れ得るであろう。

ゾシマ長老が間もなくこの世を去ろうとする夜のことだ。アリョーシャがイワンとの対決を終えて（第３章1、2）修道院に戻った頃、その日衰弱のため終日殆ど眠り続けていた長老は、奇跡的に再び意識を取り戻していた（六１）。長老はその後死が訪れる瞬間まで、時おりの中断を挟みつつ、数人の親しい人々と最期の歓談を交わす時を与えられたのである。このゾシマがアリョーシャの顔を見るや語り出したのは、八歳年上の兄マルケルのことであった。

十七歳にして奔馬性結核で世を去ったマルケルは、死を間近にして突如自らの罪深さに目覚める。つまりマルケルは、それまで自分が周囲の自然や動物たち、そして召使いや肉親たちなど、神の愛と栄光と美に満ち溢れるこの世界のことに全く目も心もやらず、何ら愛も感謝も注ぎ返すことがなかったことを、この上ない罪として自覚するに至ったのだ。彼は自らの罪のことで召使いや小鳥たちにさえ赦しを請い、人生が楽園であることを説き、そして人生を祝福し感謝しつつ最期の時を迎えたのである。「我々人間は誰でも、万人万物に対して、一切のことで、罪があるのです、しかし最も罪深いのは自分です」「人生は気づけば楽園なのです」「人間が幸福を知り尽くすには、一日あれば十分です」―― 兄マルケルのこれらの言葉は少年ゾシマの心に刻まれ、その後の生涯を通して彼を支え続けたのである。ゾシマが語ったマルケルの短い生と言葉とは、ゾシマの死後アリョーシャが編纂する「ゾシマ伝」の冒頭を飾るエピソードとなるであろう(六２Ａ)。

アリョーシャが修道院に戻り、ゾシマ長老の庵室に顔を出した時である。ゾシマは、このアリョーシャの顔が兄マルケルのことを思い出させたと語り出す。だがゾシマによれば、二人の顔立ちそのものはそう似ているわけではなかった。アリョーシャが兄にそっくりなところとは、その精神だったのである。人生の終わりに臨んで、兄マルケルがアリョーシャの姿をとり「回想と洞察のために」訪れてくれたに違いない。ゾシマは二人の顔について、このような「夢想」をしていたのだと語るのであった。アリョーシャからゾシマへ、ゾシマからマルケルへ、そしてマルケルから神へ ―― 『カラマーゾフの兄弟』を垂直に貫く聖なる系譜が、ここに新たな具体的奥行きと展望を与えられる。

「俗世で修道士としてあり」「神の民を愛するのだ」。師ゾシマのこの遺訓を受けてアリョーシャが修道院を出るのは、その死から三日後のことだ (四１、六１、七４)。アリョーシャがこの新たな旅に携えるべき「杖」としたゾシマ長老の遺訓、その教えについてもここで確認をしておこう。

ゾシマの遺訓、罪人への愛

「最も罪深い人間をこそ、誰よりも愛するのだ」(一５)。これがアリョーシャの師ゾシマ長老が死に至るまで一貫して強調した、福音書のイエスに土台を置く長老の信仰のエッセンスと言えるであろう。

> 「健かなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり」(マルコ二 17)

ゾシマ長老の教えの拠って来たるのはこのイエスの精神であり、更にそこには先に見た兄マルケルの精神が重ねられ、それがアリョーシャの心に伝えられたと考えられる。「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五 2)。己の運命の理不尽さと醜悪さへの怒りと憎悪から、イエスに向かってこの呪いの言葉を投げつけるスメルジャコフとは対照的に、病人や罪人に向けられたイエスの愛、十字架に極まるその生、つまりは「キリストの愛」を、師ゾシマ長老を介し、心に刻んで生きるのがアリョーシャである。我々は後に（本章4）、アリョーシャとその婚約者リーザもまた、将来この精神をもって生きることを誓い合うのを見るであろう。ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の最深部に置いた基本骨格とその奥行きが、ここに確認される。

「キリストの愛」、「実行的な愛」、「一本の葱」

ところでアリョーシャに関わるキー・ワードの中で、「キリストの愛」と「実行的な愛」と「一本の葱」、これら三つの言葉が示す意味とその奥行きについてもここで確認しておくことにしよう。これらはゾシマ長老からアリョーシャに伝えられた精神を理解する上で、またスメルジャコフやイリューシンを始めとする「罪なくして涙する幼な子」たちばかりか、「万人万物一切」に対するアリョーシャの信と愛の在り方を理解するためにも決定的に重要なものであり、曖昧な概念のままに放置しておくことは許されないであろう。

まずはこれらが用いられた文脈である。「キリストの愛」は「大審問官」の劇詩を挟んで、イワンとアリョーシャとが対決する際に登場する語であり（五４・５）、「実行的な愛」はまずは「場違いな会合」において、ゾシマ長老がホフラコワ夫人に語る言葉の中で用いられる（二４/その他四５）。更に「一本の葱」は、長老の死を契機とするアリョーシャの一連の回心体験の中で、グルーシェニカ訪問の際と、それに続く「ガリラヤのカナ」の夢において登場する（七３・４）。以下で順次、それらの意味と奥行きを確認しておこう。

「キリストの愛」

「キリストの愛」については、前回イワンの精神史を検討した際に確認してある（第３章2３）。ユークリッド的知性によっては神の認識は不可能であることを悟ったイワン。彼の前に広がる世界とは、「罪なくして涙する幼な子」たちの受難が繰り返されるだけの世界で

しかなかった。その苦しみを贖う存在をどこにも見出すことの出来ないイワンが、「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」のみが駆け巡る荒涼索莫たる不条理の世界を前にして出会ったのが、福音書のイエス・キリストである。この荒漠たる世界において、イエスとは神を愛として捉え、あるいは愛の神に捕らえられ、その神の愛を十字架上で磔殺されるに至るまで貫いた存在であった。イワンを捉えて離さない悪魔の「否定の精神」も、このイエスの存在と「キリストの愛」だけは認めざるを得なかったのである。「ロシアの小僧っ子」イワンの知性が持つ誠実さ、そしてその心が持つ熱さの掴んだ認識と言うべきであろう。ルカ福音書が記す十字架上のイエスを凝視し、その「キリストの愛」に感動するイワンについて、またこの「キリストの愛」を巡って、「大審問官」の劇詩を鋏みイワンとアリョーシャとが繰り広げる対決についても、我々は前回確認したのだが（第３章2)、「キリストの愛」に関するこの青年の理解の深さは驚くべきものであった。だが最大限に注意すべきは、これも前回確認したのだが（同上)、その後イワンが辿った道とは、この「キリストの愛」さえも斥ける悪魔道であった。つまり悪魔の「否定の精神」、「倨傲の精神」に身を委ねたユダ・イワンが最終的に至るのは「地質学的変動」の人神思想だったのである。その帰結が「死の床」に沈むイワンであることも既に見た。

だが我々はここでは、アリョーシャと同じくイワンの内にもまた「ロシアの小僧っ子」の熱い心が存在するという事実を確認するに留めよう。「俺に言わせると、人間に対するキリストの愛はこの地上ではあり得ない一種の奇跡だ」(五４)。ここにいるのは「神の愛」を十字架上の死に至るまで生きたイエスを凝視し、「キリストの愛」に心を震わせるイワンである。

「実行的な愛」

「実行的な愛」。これは「場違いな会合」でイワンと対決する直前、ゾシマ長老が「信仰心の薄い貴婦人」ホフラコワ夫人に対して語る言葉の中に登場する。富と地位と美貌に恵まれたホフラコワ夫人が表明したニヒリズム、死の恐怖を如何にすべきかとの問いにゾシマ長老が応え、「空想的な愛」ではなく「実行的な愛」の必要性について説くのである。

> 「実行的な愛の経験によってです。自分の隣人たちを飽くことなく実際の行動によって愛するように努めるのです。その愛の努力が実りをあげるにつれて、神の存在にもあなたの霊魂の不滅にも確信が持てるようになるでしょう。隣人愛における完全な自己犠牲の段階にまで至った暁には、その時こそあなたは疑う余地なく[神の存在も霊魂の不滅も]信じるようになり、最早如何なる疑いもあなたの心に忍び寄ることが出来なくなるでしょう。これはもう経験ずみのこと、確かなことなのです」（二４）

たとえ人は現実において如何なる疑いや絶望の底に追いやられようとも、「空想的な愛」

に逃げるのではなく、自らの生において「実行的な愛」の道を一歩一歩踏み重ねねばならない。そのことによって初めて、その絶望は克服され「神と不死」への確信が与えられる —— この「実行的な愛」あるいは「隣人愛における完全な自己犠牲」という言葉を語るゾシマ長老が土台とするのは、「善きサマリヤ人」の譬え(ルカ十 30-37)を語ったイエス・キリスト、十字架上で磔殺されるに至るまで神と隣人への信と愛を貫いて生きたその姿と考えるべきであろう。その点で「実行的な愛」は十字架に極まるイエスの生と死、つまりは「キリストの愛」と重なり、それを具体的に表現した言葉と言うべきであろう。またこのゾシマ長老の言葉は直接的にはホフラコワ夫人へのアドバイスであるが、それと同時にイワンが表現する近代合理主義精神のニヒリズムに対する、ドストエフスキイ自身の正面からの批判であり、また処方箋でもあると考えるべきであろう。

「一本の葱」

「キリストの愛」の具体的な表現としての「実行的な愛」。これは作品中に「一本の葱」という極めてユニークな語としても登場する。つまり師ゾシマ長老の死を契機として、アリョーシャが陥る絶望と、その後の一連の宗教体験において（拙著『カラマーゾフの兄弟論』Ⅶ Ａ１-３を参照)、「一本の葱」とは「キリストの愛」と「実行的な愛」を更に具体的に表現する言葉として用いられるのである。

ゾシマ長老がその死後発した余りにも早く、余りにも強烈な死臭 —— 信よりも奇跡を切望する人々、聖者の失墜を喜ぶ人々によって絶望の底に投げ込まれたアリョーシャは、グルーシェニカから与えられた愛と憐みの心、「一本の葱」によって再び「起ち上がる」。このアリョーシャが修道院に戻り、師ゾシマの棺の傍らで見るのは「ガリラヤのカナ」（ヨハネ二 1-12）の夢である。この祝宴の場の中心に座すのはイエスであり、その脇には彼を呼び招くゾシマ長老がいた。

> 「なぜ私を見て驚くのだ？ 私がここにいるのは一本の葱を与えたからだ。ここにいる人たちの大部分も、たった一本の葱を与えたに過ぎない。たった一本ずつ、しかも小さな一本の葱を・・・我らの仕事はどうなっている？ もの静かでおとなしい私の少年よ、お前も今日餓(かつ)えた女に一本の葱を与えることが出来た。始めるのだ、倅よ、自分の仕事を始めるのだ。おとなしい少年よ！ 我らの太陽が見えるか、お前にはあのお方が見えるか？」(七４)

「ガリラヤのカナ」の婚宴。「我らの太陽」イエス・キリストが与える喜びの葡萄酒の祝宴。ここに招き入れられる条件とはただ一つ、アリョーシャを呼び招くゾシマ長老によれば、「餓えた」人に「小さな一本の葱」を与え、また逆に与えられるという「我らの仕事」を果たすことに他ならない。この「一本の葱」とは、「場違いな会合」でゾシマ長老がホフラコワ夫人に語り聞かせた「実行的な愛」のことであり、また「大審問官」の劇詩を挟ん

でイワンとアリョーシャとが「キリストの愛」と呼んだものであり、更に福音書的磁場に遡れば、ルカ福音書でイエスが語った「善きサマリヤ人」の譬えにおける「隣人愛」に他ならない（ルカ十 25-37)。アリョーシャからゾシマ長老へ、ゾシマ長老とその兄マルケルからイエス・キリストへ、そしてイエス・キリストから神へ。『カラマーゾフの兄弟』を垂直に貫く聖なる系譜、「隣人愛」の系譜が「一本の葱」「実行的な愛」、そして「キリストの愛」という太い縦糸によって織りなされていることが、ここに明らかとなる。

修道院を出て

先に見たように、師ゾシマ長老の死を契機とする一連の宗教体験の三日後、アリョーシャは修道院を出る。「俗世で修道士としてあり」「神の民を愛するのだ」という長老の遺訓を受けてのことだ(四 1、六 1、七 4)。家畜追込町で一人在俗の生活を始めた彼は、婚約者のリーザやその母のホフラコワ夫人、また誤認逮捕された長兄のドミートリイやグルーシェニカ、そしてカチェリーナなどを足繁く訪問しては彼らの言葉に耳を傾けてやっている(十一 1-5)。父親殺しの後、それぞれの「悪業への懲罰」に曝されつつある異母兄弟二人とアリョーシャとの交流については、我々が第一回目から最終回の第６章まで検討を続けるテーマであるが、前回の最後（第３章6）ではアリョーシャの祈りに注目し、そこに表現された二人の兄に向けるアリョーシャの冷静で厳しい眼と、また二人に寄り添う熱い心、そして何よりも彼の神への信と愛の強さを確認したのであった。

「キリストの愛」、「実行的な愛」、そして「一本の葱」。修道院を出たアリョーシャに仮託してドストエフスキイが着手したのは、この世界で理不尽で醜悪な運命に苦しむ人々、つまりは「罪なくして涙する幼な子」たちの涙と血と痛みを、愛を以って癒し鎮め得る人間が果たしてこの世に存　在し得るのか否か、そうだとすれば如何なる形においてか、このような問いの提示と、それへの答えの試みであると言えよう。神からイエスへ、イエスからゾシマへ、そしてゾシマからアリョーシャへ。我々が確認してきた「実行的な愛」の系譜が、今度はアリョーシャからイリューシンへと、更にはスメルジャコフへと如何に伝えられるのかという課題だとも言えるであろう。

「さあ、これで十分だね？」。指から吹き出る血と供に発せられたこのアリョーシャの問いは、少年の心の底に届くのか。家畜追込町におけるイリューシン少年とアリョーシャとの出会いと交流を、以上の視野の下に追ってゆこう。

3.「垢すりへちま事件」　　― 父と子の受難 ―

アリョーシャに石を投げつけたばかりか、彼の中指の爪のつけ根あたりを骨に達するまで噛みつき、血を噴き出させた末に、大声で泣きながら走り去ってしまった少年イリューシン。我々はまだこの少年のアリョーシャに対する怒りと悲しみの拠って来たる理由、ア

リョーシャが言う「謎」を具体的に突き止めてはいない。注目すべきことに、少年たちの石投げ合戦から、アリョーシャと少年との短い対決、そして少年の逃亡に至るまで、筆者の叙述は一貫してアリョーシャの視線に沿ってなされている。筆者は少年イリューシンにまつわる「謎」のほぼ全てを、アリョーシャがそれらに順次触れさせられ、彼の心に開示される形で刻んでゆくのだ。スメルジャコフにまつわる「謎」が作品の各所に様々な形で提示されてゆくのと同様に、またイワンの「神と不死」を求める足跡が、「肯定と否定」の往還を繰返しつつ、遂には「死の床」に至るまでのドラマとして提示されてゆくのと同様に、作者ドストエフスキイの筆はイリューシンにまつわる「謎」をもまた、様々な登場人物の証言によって、アリョーシャにクレッシェンド的に提示し、開示してゆくのである。ここにあるのもまたドストエフスキイの周到な作品構成と、それを支える具体的細部描写の積み重ねである。我々も出来るだけアリョーシャに寄り添う形で、以下にまずは「垢すりへちま事件」についての情報の主なものを（1）から（6）まで追い、イリューシン少年の「謎」へのアプローチを試み、この少年の心の内に吹き荒れる嵐の全貌を理解すべく努めよう。

「垢すりへちま事件」（1） ― フョードルとドミートリイの証言から ―

退職二等大尉のスネギリョフとその息子イリューシンが、カラマーゾフ家の長兄ドミートリイによって恥辱の底に突き落とされる「垢すりへちま事件」。これはともすれば見過ごされてしまいがちであるが、『カラマーゾフの兄弟』の冒頭近くからエピローグまで、全篇を通じて一つの主要通奏低音として響き続ける痛ましい出来事である。それはアリョーシャの前で、また直接アリョーシャに対して、様々な場で様々な人物によって言及がなされ、筆者はこの事件が人々の心に及ぼした影響と、アリョーシャに与える衝撃とを伝え続ける。そこから浮かび上がるのは、我々が先に見たこの作品の中心骨格・対立軸の存在である。つまり一方にいるのは、イリューシンとスネギリョフ父子、またその向こうにいるスメルジャコフの存在、つまりは家畜追込町の現実の中に生きる「罪なくして涙する幼な子」たちの存在である。他方にいるのは、「実行的な愛」の人アリョーシャである。作品の進展に従って、様々な事件を通してこれら対極的な二つの存在が前面に浮かび上がり、両者の間に深い係わりが生じてゆくのを我々は目撃するであろう。その一つが「垢すりへちま事件」である。

さてこの事件についてアリョーシャが初めて知るのは、作品が始まって間もなくの第二篇、既に何度か見てきたあの「場違いな会合」の場においてである。当事者の父親フョードルと長兄ドミートリイが、それぞれこの事件について語るのだ。

『カラマーゾフの兄弟』の主要人物の殆んど全員がゾシマ長老の庵室に集結し、それぞれが抱える問題を曝け出す「場違いな会合」（第二篇）。この場にドミートリイが遅れて最後に登場するや、彼と父親フョードルとの間には直ちに激しい罵り合いが開始される。この時、一同を前にフョードルが暴露するのが、ドミートリイとスネギリョフとの間に起き

た一つの事件である。フョードルによれば三週間前、料亭の「みやこ」でドミートリイが、スネギリョフの顎髭を掴んで往来に引きずり出し、公の面前でひどく殴りつけたのだという。当のドミートリイもこの事実自体は否定しない。だが彼は自らの「野獣のような振る舞い」を後悔し、「遣り切れない思い」に捉われていると述べはするものの、その原因は全てフョードルの側にあるとし、次のような説明を試みる。

それによれば、父親に対して母の遺産を後からあとへと請求し続けるドミートリイを威嚇するため、フョードルはスネギリョフを代理人としてグルーシェニカの許に送ったのだ。フョードルの意図とは、もしドミートリイが更に金を要求し続けるならば、グルーシェニカにドミートリイの手形（借用証書）を流し、彼女がその手形を盾にドミートリイを刑務所に送り込むぞと脅させることであり、代理人としてのスネギリョフの仕事は、この依頼を伝えることであった（二６）。「垢すりへちま事件」の背後にあったものとは、イワンの言葉を用いれば、カラマーゾフ家の「二匹の毒蛇の喰い合い」（三９）、金と女を巡る家長と長男との骨肉相食む争いだったのである。

「垢すりへちま事件」（2） ― ドミートリイの「告白」から ―

「垢すりへちま事件」が次に言及されるのは、ドミートリイ自身の口からである。「場違いな会合」の後のことだ。ドミートリイはアリョーシャを相手に、婚約者カチェリーナとの出会いから婚約へと至る経緯、そして新たなグルーシェニカとの出会いと彼女への愛、更には彼女を巡る父親フョードルとの争いについて延々と「告白」を続ける（第三篇３・４・５、「熱烈なる魂の告白」）。その際ドミートリイは、自分がスネギリョフを往来に引っ張り出し、その顎髭を掴んで引きずり回した「垢すりへちま事件」について、改めて言及するのである。だがこの時ドミートリイは、自らの「野獣のような振る舞い」について口にはするものの、最早自らの振る舞いに対する後悔の念を表明することはない。新たな恋の囚われ人となり、その恋を弟に「告白」し、協力を仰ごうとする彼には、恋敵たる父親の使い走りをした退職官吏など、最早眼中になかったのだ。

「場違いな会合」の場に続いてこの時もまた、アリョーシャが「垢すりへちま事件」について如何なる反応を示したのか、筆者は何も記さない。だがこの事件はアリョーシャの心の内に確かに納められたのである。この事件に関するこの後の様々な出来事を経て、作品の終局「エピローグ」において、彼は兄に対する厳しい宣告を下すであろう（本章6）。

「垢すりへちま事件」（3） ― カチェリーナの説明から ―

「激情（ナドルイフ）の噴出」

「垢すりへちま事件」が次に登場するのは、イワンとドミートリイの婚約者カチェリーナとが繰り広げる恋の修羅場においてである（四５）。婚約者ドミートリイへの愛の一方、その弟イワンへの新たな愛によって心を引き裂かれたカチェリーナ。彼女の愛を独占することを願うイワンは、ホフラコワ夫人宅での出会いの場で、苦しみの極、自らの意に反し

て「永遠の別れ」を宣言し、その場を去ってしまう。第四篇の題名が示す通り（「客間における激情の噴出」）、ここにあるのは正にイワンの、そしてカチェリーナの「激情の噴出」であり、恋する二人の内から噴き出る激情の強さと複雑さは、ホフラコワ夫人の好奇心を満たし、かつ興奮させるに十分のものであった。自らの内で強く脈打ち始めた「カラマーゾフの血」に脅かされるアリョーシャもまた、これら二人の「激情の噴出」を目の当たりにして動揺し、二人の兄とカチェリーナが繰り広げる激しい愛の葛藤について、半ば的確・半ば的外れな判断と勧告を口走ってしまう。つまり彼はカチェリーナのイワンに対する愛に気づくや、直ちに二人にその愛を貫くことを迫るのだ。これに対するカチェリーナの反応は半ば憤怒、半ば歓喜に捕えられてアリョーシャを罵倒するという、これもまた容易には説明のし難い「激情の噴出」となって表出される。「あなたなんて・・・あなたなんて・・・ちっぽけな宗教的痴愚よ。それがあなたよ！」（四５）。

その直後のことだ。突然隣の部屋に去ったカチェリーナは、今度は「喜びに輝いて」戻って来る。二枚の百ルーブリ札を手にした彼女はアリョーシャに、婚約者ドミートリイが起こした騒動について説明を始めるのであった。驚くべきことに、イワンの決別宣言で動揺の極にあるはずの、またアリョーシャの言葉に激怒したはずのカチェリーナの説明は、婚約者のドミートリイが起こした「垢すりへちま事件」の概要を見事にバランスよく伝えるものであり、理由が不明なままイリューシンに指を噛み砕かれた直後のアリョーシャにとって、このカチェリーナの説明は少年についての「謎」を一部でも解き明かしてくれるに十分なものであった。これもまたカチェリーナの「激情の奔出」であり、この時アリョーシャは、女性の心の広さと複雑さ、その捉え難い不可思議について深く印象付けられたと考えるべきであろう。以下に、彼女が明らかにした新たな情報を記しておこう。

カチェリーナが調べたこと

カチェリーナの調べによれば、勤務上の落ち度で職を失った二等大尉のスネギリョフは(それが何時・何処のことであったのかは明らかでない)、家族と共に家畜追込町にかなり以前から住み着いていた（彼らの故郷が何処かも明らかではない）。定職を見出せない彼は、町で半端仕事を見つけたり、書記係のような仕事にありついたりすることで、かろうじて生計を立てていた。しかし先に見たように、フョードルの代理人として雇われた際に、運悪くドミートリイの怒りを買ってしまったのである。料亭の「みやこ」でドミートリイに出会ったスネギリョフは、顎髭を掴まれて往来に引きずり出され、公の面前で煮えたぎる怒りを叩きつけられたのだ。ところがカチェリーナの調べによれば、なんとその場に学校帰りの息子イリューシンが通りかかったのである。イリューシンは大声で泣きながらドミートリイの周りを駆け回り、彼に必死で赦しを請い、周囲の見物人たちにも助けを求めたのだが、彼らは笑って取り合わなかったという。

婚約者のこの恥ずべき行為に心を痛めていたカチェリーナは、アリョーシャに事情を説明した上で、この青年ならば相手の心を傷つけぬ配慮が期待出来ると考え、スネギリョフ

の許に見舞金を届けてくれるよう依頼したのである(四５)。先の「激情の噴出」の際、アリョーシャが語ったことは、やはりカチェリーナの心の深奥を揺り動かしていたのだ。

つい先ほどイリューシン少年に噛み砕かれた指の痛み、兄の恥ずべき行為に対する心の痛み、そして他ならぬスネギリョフとイリューシン少年の心と身体の痛み ―― これらの痛み全てを内にアリョーシャは、カチェリーナから手渡された二枚の百ルーブリ札を懐に収め、直ちにスネギリョフの住まいに向かったのであった(四６)。かくして「垢すりへちま事件」はただの小エピソードであるどころか、主人公たちの心と密接に絡み合い、アリョーシャの心の深くに喰い込む「事件」としての相貌をますます強めてゆくのである。

「垢すりへちま事件」(４)　― スネギリョフの説明から ―

今までの情報に加えて、アリョーシャが「事件」の更なる詳細とその残酷さと痛ましさを知るのは訪問先において、つまり少年の父スネギリョフの口からである(四７)。それによれば、下校時のイリューシンは一人ではなかった。学校の級友たちも一緒だったのだ。イリューシンはこの仲間たちと一緒に、父親がドミートリイによって料亭から広場に引きずり出され、顎髭を掴まれて引き回される姿を目のあたりにしてしまったのだ。少年は直ちに父親に飛びつき、「パパ、パパ」と叫びながら、父親をドミートリイから引き離そうとしたのだという。

> 「放して、放して下さい。これは僕のパパです。パパなんです。赦してやって下さい」(四７)

スネギリョフによれば、少年は必死で懇願をしながらミートリイにしがみつき、夢中でその手に接吻をしたのだ。更に父親によれば、ドミートリイがスネギリョフの顎髭を掴んで引き回したことから、級友たちは学校で彼の顎髭のことを「垢すりへちま」と呼び、息子のイリューシンをからかい始めたのだという。「垢すりへちま」という奇妙な名の由来と共に、この「事件」の悲惨さと残酷さが、ここに初めて具体的にアリョーシャに明らかにされたのである。

説明が終わるや、アリョーシャは叫び声を挙げる。

> 「誓います。兄は誠心誠意、心の底からあなたに悔恨の情を表わすことでしょう。例のその広場に跪いてでも・・・僕が必ずそうさせます。さもなければ、もう兄弟でも何でもありません！」(四７)

スネギリョフの反応は冷ややかであった。アリョーシャの言葉はその心の熱さと高潔さを証明こそすれ、実は彼がこの件で、未だ兄のドミートリイと正面から話さえしていないことを曝け出してしまったのだ。だが恐らくアリョーシャの誠意を感じたからであろう。

スネギリョフは自らの住む「穴倉」について、そこでの家族四人の生活について語り始める。この胸を打つ物語については、残念だがここで扱う余裕はない。

自らの家族について語り終えた後、スネギリョフは更に「垢すりへちま事件」について、グルーシェニカと彼との間で交わされた会話も明らかにする。自分に加えられた侮辱のことで、スネギリョフがドミートリイを裁判に訴えることを考えていた時のことだ。グルーシェニカが彼を呼び出し、脅しをかけたのである —— もしあなたが訴えるというのなら、ドミートリイがあなたを殴ったのは、あなたの「詐欺」が原因であったと世間に暴露してやるだろう。あなたを永久に追放し、今後自分の許では一切稼がせてやらないだろう。また自分のパトロンであり有力な商人のサムソーノフにも言いつけてやり、この商人からもあなたは追放されることになるであろう。

更にスネギリョフの説明によれば、ある理由のためフョードルも彼を信用しなくなり、既に彼の領収書も押さえ、裁判所に提出しようとしていたのだった。グルーシェニカとサムソーノフとフョードル。家畜追込町の金融を仕切る人間たちに睨まれ、スネギリョフが生計を立てるべき途は、今や完全に閉ざされてしまったのである。

ポーランド人将校に恋をし、捨てられてからの五年間。将校への復讐心となお断ち切れぬ愛との間で苦しみ続け、世に対してはサムソーノフやフョードルと組んで「ユダヤ女」となり遂げたグルーシェニカ(七 3)。ここに図らずも彼女の「地下室」の一端が明らかとなる。だが我々は話を拡散させず、アリョーシャとスネギリョフの対話に集中しよう。

「真理(イースチナ)」

アリョーシャが信用出来る青年であることを見て取ってのことであろう。スネギリョフは自らの内に沸騰する思いをぶちまけ始める。それはこの事件の残酷さについて、正確には息子の心が直面させられた「真理」の残酷さについてであった —— この事件によってイリューシンの内には「高潔な魂」が目覚めたこと。息子は「父親のため」「真理のため」「正義のため」一人で起ち上がったのであること。だが少年にとって、それは余りにも残酷な「真理」への目覚めであったこと・・・

> 「うちのイリューシャは、正にあの瞬間、あの広場で、あなたのお兄様の手に接吻をした正にその瞬間、真理の一切を悟ったのです。そしてこの真理があの子の内に入り込み、あの子を永遠に打ちのめしてしまったのです」(四 7)

「神と不死」という究極の「真理」を求める「ロシアの小僧っ子」たち、つまりアリョーシャやイワンやドミートリイたちを向こうに、イリューシン少年が直面させられたのはもう一つの残酷な「真理」であった。それは運命がこの少年を放り込んだ残酷な現実のことであり、その「真理」は情け容赦なく少年の内に侵入し、その心も身体もズタズタに切り裂いてしまったのだ。イリューシンばかりではない、その父親のスネギリョフにとって

も、「真理」とは運命が投げつける過酷さに他ならず、アリョーシャたちが求める究極の「真理」とは対極にあって、彼らの生そのものを「行き場のない」「穴倉」に放り込み、その心も身体も引き裂き苦しめる源そのものなのだ。「真理」を巡るこの皮肉と矛盾。『カラマーゾフの兄弟』が抱える最大のテーマの一つ、「罪なくして涙する幼な子」の受難のテーマが、スネギリョフとイリューシン父子を巡る「垢すりへちま事件」から浮き彫りにされてくる。このイリューシンとスメルジャコフ、これら家畜追込町の「罪なくして涙する幼な子」二人が結託して踏み込んだ悪魔的事件、「ジューチカ事件」については、改めて後に見よう（本章5）。

父と子の散歩

社会から閉め出された父と、級友たちから「ぼろの垢すりへちま」の息子として嘲笑される息子。スネギリョフによれば、悲しみを抱えた父と子は、毎日夕方になると手を取り合って散歩に出かけ、町外れの放牧場が始まるところ、生垣の傍らにある大きな石のところまで歩いて行くのだった。人目を避けたこの散歩道で、二人は悲しみを打ち明け合い、心ゆくまで涙を流したのである。ある時息子は父にドミートリイと決闘をするようせがむ。しかし人を殺すことは許されないと諭されると、息子は大人になって自分がドミートリイを投げ倒すことを宣言する。また彼は級友たちとの争いについて告げ、金持ちになって家族全員で他所の町に引っ越しをする夢を語るのであった。イリューシンの胸の内は、次の言葉一つに集約されるであろう。

「パパ。パパ、大切なパパ。あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」(四 7)

スネギリョフから父と子の悲しみと怒りをぶつけられ、アリョーシャの心は「涙で震えていた」。この作品の終局、アリョーシャの魂にこのイリューシンの言葉が甦る場面は、本章の最後で取り上げ、改めて検討しなければならない（6）。

「この時」とスネギリョフは語る。「我々の姿を見ていた者は誰もいません、神様お一人が見ておいでだったのです」「恐らく神様は、この私を[天の]名簿に書き入れて下さることでしょう」。筆者は彼がこうも付け加えたと記す。「お兄様[ドミートリイ]にお礼を申し上げて下さいまし」。この時のスネギリョフの奇妙な語り口について、筆者は「敵意に満ちた、そして神懸かり的な言葉遣い（ユロージヴィ・ヴィヴェルト）」であったと記す。この「神懸かり的な言葉遣い」と彼の「神様」については、本論とはまた別のスネギリョフ論で取り上げたい。

「妹」からの二百ルーブリ

「パパ。パパ、大切なパパ。あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」。先に記したように、イリューシンのこの言葉を伝えられ、アリョーシャの心は「涙で震えていた」。だがスネギリョフの多弁さは、自分への信頼の証でもあろう。こう自らを勇気づけたアリョ

ーシャは、「叫び声」を上げるかのように語ったと記される ―― 自分はあなたのお子さんと「仲直り」がしたい。また自分には「預かり物」がある。それは「妹から兄への援助の手」として差し出されたものだ。「この世界には、兄弟も存在するのです」。この言葉と共にアリョーシャが、カチェリーナから託された二百ルーブリを取り出したのは、生垣の脇にある大きな石の傍らであった。

「妹から兄への援助の手」。この二百ルーブリの運命についても確認しておこう。差し出された見舞金、夢にも思わなかったこの大金に仰天したスネギリョフは、それを受け取ることが自らの「卑劣さ」を証するのではないか、アリョーシャの軽蔑を呼ぶのではないかと尻込みをする。だが同時に彼は語り出すのだった。この金で妻と娘[ニーノチカ]が苦しむ病気の治療が可能となるだろう。家族のために馬車馬のように働くもう一人の娘[ソーネチカ]も大学に復学が出来るだろう。息子と夢見た引っ越しも実現し、自分も他所の町で書記の仕事が見つかるだろう ―― このスネギリョフに向かい、アリョーシャも申し出るのだった。「弟」として「友」として、自分もこの夢の実現のために自らの金を提供する用意がある。

この直後に訪れたのは、暫し浸った有頂天の夢想に対する激しい反動である。「崖から飛び降りる決心をした人間」のような相貌をしたスネギリョフは、異様で奇怪な目つきでアリョーシャを見つめ、口元には微笑のようなものを浮かべ、早口で囁くのだった。「一つ手品をお目にかけて進ぜましょう」。二枚の紙幣をアリョーシャの目の前に突き出した彼は、突然それらを揉みくちゃにし、砂の上に力一杯に叩きつけ、「猛烈な憎悪を以って」靴の踵で踏みにじり始める。彼は足を踏み下ろすごとに息を喘がせ、繰り返し叫ぶのだった。「ほら、あなたのお金です！ ほら、あなたのお金です！ ほら、あなたのお金です！ ほら、あなたのお金ですよ！」。突然後ろに飛びすさり、アリョーシャの前に身を立てたスネギリョフの全身は、言い表し難い誇らしさを発していたと記される。「もし我が家の恥と引き換えに、あなたからお金を受け取ったりしたら、私はうちの子に一体何て言ったらいいのです？」

立ち去るスネギリョフを、言い表し難い悲しみと共に見送っていたアリョーシャは、相手の姿が見えなくなるや、砂地にめり込んでいた二枚の紙幣を拾い上げ、それらの皺を伸ばし始める。紙幣が再び真新しい札のようにパリッと音を立てるまでになると、彼はそれらをポケットに収め、カチェリーナへの報告のため、ホフラコワ夫人宅に向かって歩き始めるのだった。彼はプライドを守ったスネギリョフが、次には二百ルーブリを受け取ることを確信していたのである。

アリョーシャの人間に対する底なしの信と愛、人間心理に関する驚くべきリアリスティックな洞察力、そして彼の婚約者リーザが持つ心根の深さとアリョーシャへの信と愛、これらを知るために、我々は彼がホフラコワ夫人の邸宅に戻り、その娘リーザと交わす会話に暫らく耳を傾けることにしよう。

4.「平等」であること　― アリョーシャとリーザが担う使命 ―

「垢すりへちま事件」（5）　― アリョーシャの報告から ―

アリョーシャがスネギリョフの住まいを訪問していた間のことである。リーザは母親のホフラコワから、スネギリョフがドミートリイに侮辱された事件について聞かされ、涙まで流していた。戻ってきたアリョーシャから報告を聞いた彼女は、アリョーシャがスネギリョフを空手のままで帰してしまったことを残念がる。だがリーザに対するアリョーシャの答えはこうであった ―― スネギリョフを追いかけない方がよかったのだ、明日になれば彼は金を受け取ってくれるだろうから。そもそもスネギリョフは大金を目の前にするや、余りにもストレートに喜びを表現し過ぎてしまったのだ。しかし彼のように真に正直で善良な人間は、自分が金を踏みにじるなどということは最後まで自覚していないものの、その予感は持っているものなのだ。だからこそ差し出された金を前にして、あんなにまで有頂天になることが出来たのだ。だが有頂天になったことで彼は自らを恥じ、自らに立腹し、更にまた余りにも早く相手に心を赦してしまったことで、自らを赦せなかったのだ。しかしひとたび金を踏みにじった以上、彼の自尊心と誇り高さは既に立派に証明されたのであり、後は必ずや必要不可欠なあの金を受け取ることになるだろう。大切なことは、スネギリョフが我々から金を受け取るとしても、その際彼が我々の誰とも「平等である」と確信していてくれることだ。

リーザの疑問、「高目線」

アリョーシャの答えが示すものとは、人間心理に関する驚くべき鋭利で的確なリアリズムであり、また人間に対する底なしの善意、信と愛である。リーザもこのことに驚嘆する。だが彼女の心には、なおどこか腑に落ちないものが残っていた。お金を巡るスネギリョフの心理について、アリョーシャが示した詳細な分析には、どこか「高みから」なされる「軽蔑」のようなものが含まれているのではないか。彼女はこの疑問を払拭し切れなかったのである。

> 「そこにはあの人への、あの不幸な人への軽蔑がないかしら・・・私たちが今あの人の心をあのように、何か高みから見るように分析したことの中には？ つまりあの人がきっとお金を受け取ると、今あのように結論したことの中には。どうかしら？」（五１）

アリョーシャは、実は自分も同じことを考えていたのだと打ち明ける。だがこの問題については、既に「帰り道で」彼の自己検証は終わっていたのである。彼によれば、ここに「軽蔑」など一切存在しないのだ。改めて彼が強調するのは、スネギリョフも自分たちと「平等（ナ・ラーヴナエ・ナギエ）である」こと、彼もまた我々と「同じ（タ・ク・ジェ）である」ということだ。

「僕たち自身があの人と同じであるのに、誰もがあの人と同じであるのに、どうして軽蔑するなどということがあるのですか？ だって僕たちは本当に同じであって、より優れているなどということはないのですから」(五１)

「平等である」こと、そして「同じである」こと

スネギリョフを「真に正直で善良な人」とし、また彼を含めた人間全てが「同じ」であり「平等」であることを正面から説くアリョーシャ。一見すると平凡な視点に見える。だがここにはこの青年を理解する上で、またこの作品を理解する上でも、極めて重要な基本的視点が存在すると考えるべきであろう。彼が説くこととは、正義感に溢れた「現代青年」ならば誰もが持つ「人間平等論」とも言えるであろう。だが思い起こすべきは、筆者が既に第一篇において、アリョーシャとは「根本的ないわば自然発生的な信」の人であり、決して他人を批判することも裁くこともせず、一切を赦す稀有な天性に恵まれた人物であると強調することだ(一 4、5)。つまりアリョーシャの人間に対する姿勢とは、近代的「人間平等論」を学び知った青年の教養に由来するものというよりは、先に見たように、遥か遠く新約的磁場にまで遡る奥行きを持ち、彼がその呼び声に応えたイエス・キリストに根を置く姿勢であり、殊にその「隣人愛」（ルカ十 27）や「相互愛」（ヨハネ十五 12-13）を土台とする人間観だと考えるべきであろう。

忘れてならないことは、作者ドストエフスキイがこの青年をして、イエス・キリストの呼び声に応えて出家をさせ、その下で修行させるのがゾシマ長老だということだ。修道院で禁欲と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守るこの長老は、地上の「主人と召使い」という身分の差別を強く斥ける人物であることは、「場違いな会合」のゾシマからも（二３・４)、またアリョーシャが編纂する「ゾシマ伝」からも明らかである（六２Ｃ、六３Ａ・Ｃ・Ｆ)。この点は最終回にも改めて確認しよう（第６章5、「研究会便り（１３)」)。このゾシマの根にあるものとは、次のようなイエスの言葉と生の姿勢であったと考えるべきであろう。

「反つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。人の子の來れるも、事へらるる爲にあらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の賠償として己が生命を与へん爲なり」

(マルコ十 43-45 他)

人間全てが「同じ」であり「平等」であること。「主人と召使い」あるいは「旦那と下男」などの身分差を超えて、人間は「兄弟」であり「友」であること。否むしろ、自らを「事ふる」人として生きるべきこと —— ドストエフスキイは、アリョーシャの信念と生の姿勢の根を、ゾシマ長老を介して、マルコ福音書のイエスに置いたと考えるべきであろう。

この視線は一部ではあれ、既に『夏象冬記』の旅（１８６２）において明確に打ち出さ

れていることも確認しておこう。彼がパリで目撃したものとは、かつて「自由・平等・友愛」の旗印の下に命を賭けて革命を戦ったフランス国民が、それから一世紀も経たぬ内に、今やナポレオン三世の支配下で、かつての理想を失い、マモン（金銭）の神に魂を売り渡し、「嬉々として精神を縮こまらせ」、小市民（プチ・ブル）化への道を歩む姿であった。フランス革命が旗印とした「自由・平等・友愛」という三つの理念は、ドストエフスキイにとっても青年時代以来の理想であった。つまり人間が「自由」であるか否かということ、「友愛」の心に満ちているか否かということ、この二つと同時に、人間が「同じ」であり「平等」であるか否かということは、福音書に土台を置く決定的な価値判断の基準であり、それをフランス革命が束の間たりとも現実のものとしてくれたと思われたのだ。しかし『夏象冬記』の旅で彼が目撃したロンドンとパリとは、その理想が既に異教神バアルとマモンによって踏みにじられ、黙示録の街「バビロン」と化した二都だったのである（拙著『隕（お）ちた苦艾（にがよもぎ）の星（ほし） ―ドストエフスキイと福沢諭吉 ―』河合文化教育研究所、1997）。

さてイエス・キリストとゾシマ長老に加えて、我々がもう一人忘れてはならないのはゾシマの兄マルケルである。先に見たようにマルケルが死の間際に豁然として与えられたのは、己の根源的罪性についての認識と、そこからくる万人万物一切との一体感と、それらへの愛と、そして聖なる楽園感覚であった。聖像の前にお燈明を灯そうとした老いた乳母に対して、マルケルが語りかけた言葉を確認しておこう。これもまたアリョーシャがゾシマ長老から語り聞かされ、その後「ゾシマ伝」に収録したものである。

> 「灯しておくれ、婆や。灯しておくれ。以前には禁じたりして、僕は冷血漢だった。婆やは燈明を灯しながら、神にお祈りをする。僕の方は婆やを喜びながら、お祈りをする。ということは、同じ神に僕らはお祈りをしているということではないか」（六２Ａ）

> 「お母さん、僕の喜びよ、主人と召使いが存在しないわけにはいかないでしょう。でもこの僕が僕の召使いたちの召使いになっても構わないでしょう。あの人たちが僕の召使いであるのとまったく同じように」（同上）

死を前にしてマルケルの心に臨んだ己の根源的罪性の感覚、万人万物一切に対する罪の自覚とは、その裏返しに万人万物一切が「同じ神」の下に存在する、そして「同じ神の前にお祈りをする」との絶対的被造物感情であり、そこから来る絶対的一体感と平等感であり、それらへの熱烈な愛の感情であった。「同じ神」への祈りから与えられる万人万物一切の一体感と平等感、そして万人万物一切への愛。これはマルケルからその弟ゾシマに伝えられ、更には若きゾシマ自身の回心体験を呼び起こすばかりか、やがて長老となったゾシマの説教の主テーマとなり、更には弟子アリョーシャが生の基本的姿勢として受け継ぎ、彼が編纂する「ゾシマ伝」の基調音、つまりは『カラマーゾフの兄弟』の根底を貫く基本

的通奏低音となって響くものである。

「殉教者」の心

続いてアリョーシャは、自分の魂がちっぽけなものでしかないこと、それに比べスネギリョフの魂はちっぽけどころか、逆に非常に繊細であることを告げ、加えてリーザに次のようなゾシマ長老の言葉を告げるのであった。

> 「ね、リーザ、かつて僕の長老がこうおっしゃいましたよ。《子供の世話をするように、絶え間なく人間の世話をしてあげる必要がある。またある人たちについては、病院にいる病人のように、世話をしてあげるのだ》」（五１）

先に挙げたイエスの言葉(マルコ二 17)を向こうに置いて、ゾシマが語った言葉であろう。リーザは心を揺り動かされ、二人は共に将来「病人の世話」をし「人間の面倒」を看ることを誓い合う。書かれずに終わった『カラマーゾフの兄弟』後篇への重要な布石となる言葉と考えるべきであろう。これに続いて報告されるのは、婚約者たちの一時の幸福である。だがこれについては省略しよう。

最後にリーザから、あなたは二人の再会以来「言い知れぬ不安と悲しみ」の中にあるようだと指摘され、アリョーシャが彼女に語った言葉も確認しておかなければならない。リーザとの会話から、彼の言葉のみを列記しておこう。

> 「兄たちは自分を滅ぼそうとしています」
>
> 「父もそうです。そして他の人たちをも一緒に滅ぼしてしまうことでしょう。ここにはいつかパイーシィ神父がおっしゃった《地上的なカラマーゾフの力》が働いているのです。地上的で、凶暴で、むきだしの力が・・・この力の上にも神の霊が働いているのか、それさえ僕には分かりません。分かっているのは僕自身もカラマーゾフだということだけです・・・」
>
> 「僕は修道僧です。修道僧ですよね？ 僕は修道僧でしょう、リーザ？ あなたはたった今僕のことを修道僧だと言いましたよね？・・・でも僕は、もしかしたら神を信じていないかもしれません」
>
> 「それに今、他のことはさておき、僕の友［ゾシマ長老］がこの世を去ろうとしているのです。世界で一番の人がこの世を去ろうとしているのです。ああ、リーザ、あなたが分かってくれれば、分かってくれればいいのですが。どれほど僕がその人と繋ぎ合わされ、固く結ばれているかということを！ 僕は一人で取り残されてしまうのです・・・僕はあなたのところに来ます、リーザ・・・これからはずっと一緒にいましょう・・・」（五１）

万人万物一切の上に「神の霊」の働きを見ずにはいないアリョーシャ。その彼に差し迫る家族の悲劇と、自分自身の内でも激しく胎動を始めた「地上的なカラマーゾフの力」。神への信の揺らぎ。そして近づくゾシマ長老の死 ―― この時自分が直面する、そして間もなく直面させられるであろう問題のほぼ全てを、アリョーシャはリーザに正直に告げたのである。後に彼と悪魔の問題を考える時（5）、我々はもう一度ここに戻らねばならない。

最後にもう一点、注目をしておこう。先に見た「高目線」ということでリーザが投げかけた問い、これをアリョーシャが改めて取り上げることだ。アリョーシャはこれが「殉教者」的な問いであるとし、このような問いが浮かぶ人とは自分自身が苦しむことの出来る人であり、リーザ自身が肘掛椅子に座って既に多くのことを考えてきた証拠であると評するのである。不幸な人とその苦しみに心を寄せ、自らが苦しむことの出来る人リーザ。アリョーシャは彼女を「殉教者」として捉えたのだ。アリョーシャのこの視線は、リーザその人を考える上で、また書かれずに終わった『カラマーゾフの兄弟』後篇における二人の将来の運命を考える上でも、先の二人の誓いと共に忘れてはならないものであろう。

5.「ジューチカ事件」　― イリューシンとスメルジャコフ ―

浮かび上がる問題軸と作品構成

「垢すりへちま事件」について筆者が記す様々な情報と、様々な登場人物たちがもたらす証言を（1）から（5）へと順次検討してきた。このことから作者ドストエフスキイが、この事件に関する情報を周到に各所に配置し、それらの開示と重ねてアリョーシャの認識と自覚の深化をクレッシェンド的に進ませるという作品展開が明らかとなった。この構成に沿って、我々もアリョーシャの思想とその根を確認してきたのである。

だが、まだ終わりではない。この「垢すりへちま事件」について、アリョーシャに最後の情報をもたらす人物がコーリャ少年である。「垢すりへちま事件」から既に三ヶ月近くが経ち、父親殺しの罪で誤認逮捕されたドミートリイの公判が迫り、イリューシン少年の死も間近となった十一月初旬のことだ。アリョーシャはコーリャと初めて出会い、この少年からイリューシンに関する悲劇の全体像を知らされる。「垢すりへちま事件」と「ジューチカ事件」ばかりか、他の様々な出来事がイリューシンの心を如何に苦しめていたか、その具体的で詳細な経緯がコーリャから明らかにされ、またこの事件に関してコーリャが演じていた役目、正確にはこの早熟な少年の溢れる善意が演じた罪深い「復活劇」も明らかとされるのである。

ここから、イリューシン少年の悲劇がスメルジャコフと密接に関係するものであること、そして彼ら二人を極とする「罪なくして涙する幼な子」のテーマが、実は「場違いな会合」から「エピローグ」に至るまで、主要通奏低音として止むことなく響き続けていることが明らかとなると共に、作者ドストエフスキイがこの二人の悲劇に、「実行的な愛」の人アリ

ョーシャを対置させるという形で、この作品の根本的な問題軸を構成していることも明らかとなるであろう。コーリャの報告については、このすぐ後に「垢すりへちま事件」（６）として扱おう。

修道院を出たアリョーシャ

まず修道院を出た後のアリョーシャについて見ておこう。ゾシマ長老の遺訓に従い、その死後三日して修道院を出たアリョーシャは、「父親殺し」を巡りそれぞれの「罪」と向き合うイワンとドミートリイを訪問し、彼らの心に寄り添い、彼らを「真実の光の中に」（アリョーシャの「祈り」の中の言葉である。十一１０、第３章6）起ち上がらせるべく努めている。また彼らと深く関わるカチェリーナやグルーシェニカ、そして自らの婚約者であるリーザやその母ホフラコワ夫人をも彼は絶え間なく訪れ、その悩みに耳を傾けてやっている。更にアリョーシャは二ヶ月前、カチェリーナの依頼でスネギリョフの住まいを訪れて以来（四６、本章3）、「死の床」にあるイリューシンを絶えず訪問し、その家族全員とも交流を深めている(第十篇)。仔犬のペレズヴォンを連れたコーリャが登場し、アリョーシャと初めての会話を交わすのは、その交流も最終段階に至ってのことである。

「実行的な愛」の人アリョーシャが、様々な人々との間に繰り広げてゆく交流。その延長線上にはスメルジャコフの婚約者マリアがいたこと、更には彼がスメルジャコフとも何らかの形で関わっていたこと、これらの可能性も考慮されねばならないであろう。だがこれら二人とアリョーシャとの交流について、筆者が直接明示することは殆どない。この問題については、次回のドミートリィに関する考察を経た上で（「研究会便り（１２）」）、最終回に正面から取り上げることにしよう（「研究会便り（１３）」）。

コーリャとの出会い

さてコーリャとアリョーシャとの出会いは、スネギリョフの住まいの前において行われる(十４)。仔犬のペレズヴォンを連れてイリューシンの許を訪れたコーリャは、この病に伏す少年との二ヶ月ぶりの再会の前に、是が非でもアリョーシャと会い、彼と知り合いになっておきたかったのだ。アリョーシャはこの二ヶ月の間に、敵対していたイリューシンと級友たちとを、一人ひとり丁寧に和解させ、「毎日」彼らと共に「死の床」にあるイリューシンを見舞っていた。ところが何故かコーリャだけはそこに加わろうとせず、「特別な目的」のため、一人この日を待っていたのである。少年コーリャのユニークさについて、恐らくは後篇への布石であろう、筆者は三つもの章を用い、様々なエピソードと共に「悪戯心」に溢れたこの少年を活写している（十１-３）。陰鬱な色調を基本とするこの作品の中に、微笑ましく清冽な風が吹き込む三章である。だがここでそれらを取り上げる余裕はない。

二十歳の青年と十三歳の少年。二人は出会ってすぐに、互いが深く結ばれ心を通い合わせ得る「友」であり、また「師」となり「弟子」となる運命を直観する。だがコーリャと出会うやアリョーシャがしたこととは、コーリャが連れて来た仔犬があのジューチカでは

ないのかと尋ねることであった。それというのも前々回に見た「ジューチカ事件」（第 2 章 1、「研究会便り（９）」）、つまりスメルジャコフがイリューシン少年を唆し、仔犬のジューチカにピン入りのパンを呑み込ませたあの事件こそ、「垢すりへちま事件」と共に、死にゆくイリューシンの心を苛み続ける痛恨事であり、またこの少年に寄り添う人々の胸をも抉り続けていたからである。アリョーシャによれば、スネギリョフと少年たちは町中を探したが無駄であった。またイリューシンはアリョーシャの目の前で、「三度まで」涙ながらに、父スネギリョフに語ったのであった。

> 「パパ、僕が病気になったのはね、僕があの時ジューチカを殺したからなんだよ、神様が罰を下したからなんだよ」（十４）

アリョーシャは仔犬を連れてきたコーリャを見て、長いこと姿を見せなかったこの少年が、とうとうジューチカを探し出して来てくれたのかと思ったのだ。だがそれはジューチカではなく、「コーリャのペレズヴォン」であった。筆者はコーリャがこの時「謎めいた微笑を浮かべた」と記す。続いてコーリャは、まずは「事情の一切」を説明させてほしい、自分はそのために来たのだからと語る。イリューシンに指を噛み砕かれてから二ヶ月が経って初めて、あの投石合戦や「垢すりへちま事件」を含んで、この少年を巡る様々な出来事の全体像が、つまりは「謎」がアリョーシャに明らかとなる時が来たのである。

二人の少年の出会い、「感傷的態度（センチメンタリズム）」

コーリャの説明は彼自身とイリューシン少年との出会いから始まる。この春予備クラスに入ってきたイリューシンは、その「気位の高さ」によってコーリャの目を引いたのだという。イリューシンも二歳年上のコーリャを心から慕うようになり、常に彼の後を従い歩くようになる。ところがやがてイリューシンの内から湧き出てきたのは、コーリャへの「奴隷のような心服」と同時に、それとは逆の「反抗的な態度」であった。コーリャの言葉で言えば、イリューシンの内には「感傷的態度（センチメンタリズム）」が、つまり愛情の独占欲が生まれ出たのだ。恐らくコーリャとはイリューシンが出会った初めての先輩であり友であり、全てをぶつけることの出来る存在だったのであろう。このような「感傷的態度」は「鍛え直して」やらねばならない。コーリャはイリューシンに対して、意図的に冷淡な態度を取り始める。

「ジューチカ事件」

ところが間もなくコーリャは、イリューシン少年が日に日に思い悩み、悲しみに打ち沈んだ様子を増し加えてゆくことに気づく。この深い悲しみの内には「感傷的態度」とは違う何かが、つまり愛情の駆け引きの問題などを遥かに超えた「悲劇」の匂いが感じられた。コーリャから問い詰められ、イリューシンが明かしたのは「ジューチカ事件」のことであった。この少年はスメルジャコフに唆され、番犬ジューチカにピンを忍び込ませたパンを

食べさせてしまったのである。ジューチカは悲鳴を上げて走り去る。自らが仕出かしたこの「愚劣で」「卑劣な悪戯」に、イリューシンは魂を根底から震撼させられてしまう。仔犬を殺してしまったとの「良心の呵責」に沈むイリューシンを前にして、コーリャはこの少年の「卑劣さ」を改めて「鍛え直すべく」、わざと以前よりも冷淡な態度をとり、「絶交」さえ宣言するのであった。たがこの絶交宣言はコーリャの「芝居心」から出たものであり、彼はわずか四-五日間だけイリューシン少年を懲らしめ、少年が後悔したことを見届けてから手を差し延べようと目論んでいたのである。だがコーリャの「芝居心」は大きく目算が狂う。彼の絶交宣言に対して、イリューシンもまた一つの宣言を以って応えたのだ —— 自分はジューチカに対してばかりか、全ての犬にピン入りのパンをまいてやる。

「垢すりへちま事件」（６）、そして「投石合戦」

コーリャから向けられる冷淡な視線と態度。二人の間の闘いがどれだけの間続いたのかは記されない。そこに突然起こったのが、あの「垢すりへちま事件」であった。その場に居合わせた級友たちは、翌日学校に行くと「垢すりへちま、垢すりへちま」と囃し立てる。コーリャの絶交宣言に続く級友たちの嘲笑。全くの孤立無援の中で、級友たちとの間に新たに喧嘩が始まる。その場に行き合わせたコーリャと目が合うや、突然イリューシンはペン・ナイフで彼の右足の腿を突き刺してしまう。この事件の直後に起こったのが、下校途上のあの投石合戦であり、アリョーシャはここに行き合わせたのだ。コーリャは「ペン・ナイフ事件」のことを、先生にも母親にも告げることはしなかった。翌日からイリューシンは病の床に伏し、最早学校に出て来ることはなかった。だがコーリャはこの少年を「赦して」やりに、つまり「仲直り」をしに行くことはしなかった。彼には「特別な目的」があったからである。

この「ジューチカ事件」については、アリョーシャがスネギリョフ家を訪問するようになってから、またフョードル殺害事件やスメルジャコフとの関わりからも、「垢すりへちま事件」と共に、既に早い時点でアリョーシャの耳に入っていたと考えてよいであろう。事実アリョーシャにとっても、またコーリャを除いてイリューシンを毎日のように見舞うようになった少年たちにとっても、この事件と仔犬の安否は「垢すりへちま事件」と共に、死を間近にしたイリューシン少年を巡る最大の心痛事となっていたのである(十３・４・５)。我々は「ペン・ナイフ事件」もまた、イリューシンの胸を苦しめていたことを忘れてはならない。

かくしてアリョーシャは、コーリャの説明によって初めて、「ジューチカ事件」に先立つイリューシン少年とコーリャとの心理的葛藤劇や、その後の「垢すりへちま事件」や「ペン・ナイフ事件」や「投石合戦」などについて、時系列的な順序を含め、少年の悲劇と苦悩の全体像を詳細かつ正確に知るに至ったのである。

情報の整理

以上見てきたように、この作品において、イリューシン少年に関わる情報は様々な場所で、しかも様々な形で提供されてゆく。「垢すりへちま事件」と「ジューチカ事件」との前後関係さえ、ともすれば正確には捉え損なってしまう危険もあるのだ。イリューシン少年が苦しむ罪意識も、作品の終わり近く、第十篇に至って初めて明らかにされる。これら全てが、アリョーシャの認識の深まりと呼応させるべく、作者の緊密な構成の下に配置され、卓越した筆によって描写されるとはいえ、我々読者がイリューシンの心の動きを正確かつ詳細に捉えることはなかなか容易ではない。

改めてここで確認しておこう。イリューシン少年は、コーリャとの愛憎の葛藤の只中で「ジューチカ事件」を起こしたのであること。そしてその罪意識に苦しむ少年に追い打ちをかけるように「垢すりへちま事件」が生じたのであること。つまり決して「垢すりへちま事件」が先にあり、それへの復讐心から少年が「ジューチカ事件」を起こしたのではないこと。その他の「ペン・ナイフ事件」や「投石合戦」も、コーリャとの心理的葛藤劇から「ジューチカ事件」、そして「垢すりへちま事件」へと続く一連の激震の中から生じたものであり、これらによって恐らくイリューシン少年の心はズタズタに引き裂かれていたのであること —— ここから浮かび上がるのは、イリューシン少年の悪魔性であり、また悲劇性である。アリョーシャが「実行的な愛」を以って、そしてコーリャが「特別な目的」を持って向き合おうとしていたのは、イリューシン少年がこの悪魔性と悲劇性とによって自らを追い込み、そして追い込まれてしまった複雑な心理的苦悩の地獄だったと考えるべきであろう。

我々が第一回目から追っているスメルジャコフのドラマとの関わりで、今回明らかとなった時系列的関係も、改めてここで確認しておこう。「場違いな会合」においてフョードルが語るところによれば、「垢すりへちま事件」は「場違いな会合」の三週間前のことであった。そしてこの「あかすりへちま事件」は、コーリャがイリューシンへの絶交宣言を四-五日もしたら解除しようとしていたという報告と、その解除がない内に事件が起きてしまったという事実から判断すると、恐らくは「ジューチカ事件」から一週間も経たぬ内に起きたものと考えられる。またフョードルをスメルジャコフが殺害するのは「場違いな会合」の二日後、ゾシマ長老の死の翌日のことだ。かくしてスメルジャコフがイリューシン少年を唆して「ジューチカ事件」を起こしたのは、長老の死と父親殺害の一ヶ月ほど前ということになろう。ゾシマ長老の死とフョードル殺害事件に向かい、カラマーゾフの兄弟たちを中心に演じられる様々なドラマと並行して、「罪なくして涙する幼な子」たる二人の運命への復讐劇もまた、家畜追込町の一角で着々と進行していたことが明らかとなる。そしてその中心にいた人物がスメルジャコフであることも浮かび上がる。家畜追込町を舞台にドストエフスキイが刻んだのは、ブラック・ホールたるスメルジャコフを中心として展開する、これら何重にも重なる終末論的ドラマだったとも言えるであろう。

「罪なくして涙する幼な子」の罪、そしてアリョーシャ

このような展望の下に見ると、登場人物たちのそれぞれの罪との対決が描かれるこの作品において、誰よりも早く自らの内なる罪性と直面させられ、罪意識の地獄に追いやられていたのはイリューシン少年であったことになる。かくして我々が直面させられるのは、「罪なくして涙する幼な子」たちの心にさえ忍び込む悪魔の問題、人間の根源的罪性の問題であると言えよう。作者ドストエフスキイはこの問題に対し、イエスに根を置くアリョーシャの「実行的な愛」を対置させ、究極の救済の可能性について思索したのだ。具体的には「ジューチカ事件」と「ペン・ナイフ事件」によって罪意識の地獄に追い込まれたイリューシンと、「父親殺し」によって死相まで現れるほどの「悪業への懲罰」の現前に曝されるに至ったスメルジャコフ。ドストエフスキイは主人公アリョーシャを、これら運命への復讐劇によって今や「罪人」となった不幸な二人と正面から向き合わせ、如何にして彼らを闇の中から光の内に呼び戻し得るか、如何なる形で彼らに「一本の葱」を与え得るかの問題と取り組ませたのだと言えるであろう。このアリョーシャの背後にいるのはゾシマ長老であり、「最も罪深い人間をこそ、誰よりも愛するのだ」という彼の遺訓であるといこと、更にその背後にいるのはイエスであり、「健かなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり」という彼の言葉であるという奥行きも、改めて我々の視野の内に入って来ると言えよう（本章2）。

コーリャの「特別な目的」

コーリャとイリューシン少年との再会の後、つまりはこれから確認する「ジューチカ復活劇」の後、再びコーリャとアリョーシャとが語り合う場をまず見ておこう。

「ジューチカ事件」に関してコーリャが明かした「特別な目的」とその事情。それは以下のようなものであった ——ジューチカはピンを呑み込んではしまわず、ある家の裏庭に潜んでいたのだ。この仔犬を探し出したコーリャは、「ジューチカ［仔犬、番犬］」という名を「ペレズヴォン［鳴り響き、轟き渡り］」と名付け直し、この仔犬を密かに一人で鍛え上げ、服従と様々な芸を教え込んだ上で、ある日突然イリューシンの許に連れてゆき、ジューチカを殺してしまったと思い込んで罪意識に苦しむこの少年を、一気に絶望の底から救い上げてやろうとしたのである。この計画の最後の仕上げは、イリューシンの家族と級友たちの前で、それもとりわけアリョーシャの目の前でなされなければならなかった。ペレズヴォンを連れたコーリャが、スネギリョフ家に入る前のアリョーシャを呼び出したのは、このためであった。つまりこの少年は、誰よりもまずアリョーシャに自分の「偉業（いさおし）」を認めて貰おう、そのことでジューチカ復活劇の輝かしい第一幕を存分に味わおうとしたのである。だがこの少年はこれでも満足しなかった。彼はこの晴れ舞台を更に盛り上げよう、自らの偉業を更に「鳴り響き」渡らせようと、火薬と実弾付きの小型の大砲まで用意していたのである。

コーリャの「悪戯心（いたずらごころ）」

効果は絶大であった。だがこの輝かしい晴れ舞台には、実際には致命的な落とし穴が潜んでいたのである。筆者によれば、重なる苦悩に加え、病で身体の衰弱し切ったイリューシンにとり、思いもかけなかったジューチカの出現は、コーリャが狙ったような劇的な効果をもたらすどころか、それを遥かに超えて「苦痛に満ちた」「致命的な影響」を招来することになってしまったのだ。というのも「ペレズヴォン」という名を持つ仔犬の登場は、確かに「ジューチカ」の「復活」には違いなく、イリューシン少年に測り知れぬ歓喜と感動をもたらしたことは否定出来ない。だがイリューシンが目にしたのは、自分が殺したと思い込んでいた「ジューチカ」ではなく、「死んだふり」を始めとする様々な芸当を仕込まれた「コーリャのペレズヴォン」でしかなかったのだ。ジューチカにピン入りのパンを呑み込ませ、死に追いやってしまったと思い込んだイリューシンの絶望と悲しみ、その罪意識はコーリャの小細工で消え去るには、既に余りにも深く、余りにも激しく少年の心と身体とを侵蝕してしまっていたのである。

筆者はアリョーシャが、「不満げな非難」を込めて「叫んだ」と記す。

> 「それでは、君は本当に、犬に芸を仕込むだけのために今までずっと来なかったのですか！」（十４）

人を批判したり裁いたりすることを、まずしないアリョーシャ。その彼が発した極めて珍しい叱責の叫びである。二ヶ月をかけてコーリャが成し遂げた仔犬の「復活」は、呑み込んだピンの痛みに悲鳴を上げて逃げ去った「ジューチカ」から、様々な芸を仕込まれた「ペレズヴォン」へ、つまりはコーリャの奴隷犬への「変身」でしかなく、それは少年自らが呼ぶように「手品」、あるいは「芝居」でしかなかったのだ。そこにイリューシンに対する底なしの好意、溢れる善意があったことは事実であろう。だが実際に現われ出たものとは、コーリャ自身の「悪戯心（いたずらごころ）」によって作り出された「復活劇（ごっこ）」でしかなく、イリューシンの「歓喜」にもかかわらず、罪意識の問題の解決からは程遠かったのである。

アリョーシャが見つめるもの、「自尊心（サマリューピエ）」と悪魔

コーリャの「悪戯心」から次々と弾むように湧き出てくる「手品」や「芝居」。これはアリョーシャも直ちに見抜き深く共感したように、この少年の「素晴らしい天性」に由来する生命力の爆発であり、「若い心に芽生える芸術的欲求」を証するものに他ならない。だがそれはコーリャ自身も言うように、未だ「自尊心から、エゴイスティックな自尊心（サマ・リューピエ）と全くの自己専制（サマ・ブラースチ）から」生まれ出た「手品」でしかなく、未熟で「感傷的な」「芝居」以上のものとはなり得ず、「滑稽さ」を免れないものでもあるのだ。

だがアリョーシャは、「自尊心」と「自己専制」を自覚し、その「滑稽さ」を自ら認め、自分を「卑劣漢」だとまで言って責めるコーリャを受け容れ、この少年に言い聞かせる。「今では才能のあるほとんど全ての人が、自分が滑稽であることをひどく懼れ、そのことで不

幸になっているのです」。このことはコーリャのみか、自分もそうであったし、子供でさえそのことで悩んでいるのが現代である。こう指摘した後、アリョーシャは激しい言葉でその話を締め括る。

「これはほとんど狂気の沙汰です。この自尊心という形で悪魔が姿を取って現れ、あらゆる世代の内に忍び込んでしまったのです。正に悪魔です」（十６）

この時アリョーシャの視線がこの少年の内に見て取ったのは、その心の奥深くに住みついた悪魔、つまり彼がその「自尊心」から未だ振り払い得ていない「自己中心性」、イワンの「地質学的変動」の中で言われる「倨傲の精神」と呼ぶべきものであろう。この「悪魔」がコーリャに二ヶ月もかけて、偽りのジューチカ復活劇を仕組ませたのだ。アリョーシャにとって「悪魔」とは、少年コーリャばかりか、人間の心の奥深くに入り込み、その思索を全て自己中心的・自己宣揚的なものに捻じ曲げさせてしまう厄介な存在なのだ。

アリョーシャにとっては、たとえ未熟な「手品」や「芝居」に終わろうとも、人間が「悪戯心」を以って自らの生命力の発現を計ることは、先に確認したように、人間が与えられた「素晴らしい天性」に由来する生命力の自然な発露であり、「若い心に芽生える芸術的欲求」の表現そのものなのだ。ところがこれが滑稽に見えてしまうこと恐れる「自尊心」という形で、悪魔が現代人の内に忍び込んでしまったのだ。

長い間知り合いになることを願い、その出会いのための手土産としてジューチカの復活劇まで用意した末に、いよいよコーリャが出会ったのは、人間と世界が落ち込んだ悪魔の陥穽を厳しく見つめるアリョーシャだったのだ。しかもアリョーシャはこの十三歳の少年に、人間と時代を見据えるその鋭い観察と思索を、何の手加減もせず惜しげもなくぶつけたのである。アリョーシャによって人間と時代が宿すばかりか、他ならぬ自分自身の内にも宿る悪魔を見抜かれ指摘された少年の驚きと感動は如何ばかりであったろう。

「少年たち」と題された第十篇とは、コーリャとその級友たちとイリューシン、これら正に「少年たち」を巡るドラマであるが、その「少年たち」の中心にいるのは、彼らよりも更に少年の心を持ち、しかも人間の内に、そして彼ら少年の内にさえ宿る悪魔を見据える「幼な子」アリョーシャだったのだ。ここにあるのも、ドストエフスキイの見事な作品構成である。

『カラマーゾフの兄弟』、悪魔のいる神話的世界

ところで悪魔の「否定の精神」に自らを委ね、神を否定し、「キリストの愛」を斥け、スメルジャコフと共に「父親殺し」に踏み込み、遂には「兄弟殺し」の果てに「死の床」に沈んだのはイワンであった（前回、「研究会便り（１０）」）。前回我々が確認したのは作品の終局近く（十一１０）、人格崩壊を間近にするこの兄イワンが、悪魔の捕らわれからようやく脱し、やがて神の手の内に摂取されてゆくであろうことを確信し、神に祈りを捧げる

アリョーシャの姿であった。イワンにとっても、アリョーシャにとっても、またスメルジャコフや他の登場人物たちにとっても、悪魔とは人間と世界と歴史の中に現に生き、彼らの生死を分けさえするリアルな存在なのだ。つまり『カラマーゾフの兄弟』とは、ロシアの田舎町の現実の中で繰り広げられる物語であると同時に、福音書世界においてと同様、悪魔が活きて働く世界であり、その中で登場人物たちが思考し行動する神話的世界でもあること、この二重構造（ヴェルテップ）において展開する物語世界であることを、我々は改めて認識する必要があるだろう。

ドストエフスキイがアリョーシャを深々と福音書的神話的磁場の内に置き、悪魔の生きる世界で思索し行動する人間として描いていることが確認された。この悪魔の問題を更に考えるために、またアリョーシャについての理解を更に深めるためにも、作者ドストエフスキイがアリョーシャと悪魔の問題について如何に描いているか、以下で具体的に見ておくことにしよう。

悪魔の夢、リーザとアリョーシャ

アリョーシャと「悪魔（チョールト）」。この問題を考えるために、彼とリーザとの最後の対話に目を向けてみよう。先に見た、スネギリョフ家訪問から帰ったアリョーシャがリーザと交わした対話、人間の「平等」と「等しさ」を巡る対話（五１、本章4）ではない。この対話から二ヶ月後の裁判の前日、既に婚約を解消した二人が正面からの対話、というよりは「対決」を繰り広げるのである（十一３、この対決の詳細は、拙著『カラマーゾフの兄弟論』Ⅰ・Ⅷを参照）。その終わり近くのことだ、リーザは自分が時々見るという悪魔（チョールト）の夢について語り出す。

> 「私は時々夢で悪魔たちを見るの。どうも真夜中みたい。私は蝋燭を持って部屋にいるの。すると突然至る所に悪魔たち。あらゆる片隅に、テーブルの下にも。ドアが開けられると悪魔たちはそこ、ドアの外にひしめいていて、入ってきて私を捕まえようと思っているの。そしてずっと近寄ってきて、今にも私を捕まえそうになるの。ところが突然私は十字を切ってやる。すると悪魔たちはみな後ずさりをするの。怖がっているのよ。ただ完全には退散しないで、ドアの所や片隅に立って待ち構えているの。突然私は神さまの悪口を大声で言ってやりたくなる。そして実際悪口を言い始めるの。すると突然彼らはひしめき合って私の方に向かって来るの。とても喜んで。そしてまた私を捕まえようとするの。ところが突然私はまた十字を切ってやる。すると彼らはみな後ずさりをするの。恐ろしいほど楽しい、息も詰まりそうなくらいよ」（十一３）

アリョーシャの悪魔

この告白を聞いたアリョーシャから、驚くべき言葉が飛び出す。「僕もまた、それと全く同じ夢を

よく見ていました」。アリョーシャがこの夢を「よく見ていた」のは、果たしていつ頃のことなのか。今度は、二人の二ヶ月前の会話に戻ろう。本章の4で見たように、リーザから二人の再会以来「言い知れぬ不安と悲しみ」の内にあるようだと指摘され、アリョーシャが彼女に打ち明けたのは、彼を捕らえる様々な不安であった。父や兄たちに迫る悲劇への不安（「兄たちは自分を滅ぼそうとしています」「父もそうです。そして他の人たちをも一緒に滅ぼしてしまうことでしょう」）。自らの内で激しく胎動を始めた「地上的で、凶暴な、むきだしの力」たる「カラマーゾフの力」への不安（「この力の上にも神の霊が働いているのか、それさえ僕には分かりません」）。差し迫る長老の死への不安と悲しみ。そして何よりも神への信の揺れに対する不安（「僕は、ひょっとすると神を信じていないかもしれないのです」）。

ゾシマ長老の死はアリョーシャがこの不安を表明した夜のことである。それから三日して僧院を出たアリョーシャが、長老の遺訓に従い、一人俗世における「実行的な愛」の生を開始したことは先に見た通りである。このアリョーシャの心に、先の不安がいよいよ具体的な夢の形をとって現れ出たと考えるのが自然であろう。長老の死とその腐臭の醜聞によって、「一本の葱」の授受と「ガリラヤのカナ」の夢、そして満天の星空の下での神の現前という見事な一連の宗教体験（七３･４）を与えられたアリョーシャの心が、その一方で悪魔たちを前に「神さまの悪口を大声で」叫ぶ夢の舞台ともなっていたのだ（アリョーシャの宗教体験についても、拙著『カラマーゾフの兄弟論』後篇、Ⅱ７Ａを参照されたい）。

作者ドストエフスキイは冒頭の第一篇において、アリョーシャを「根本的ないわば自然発生的な信」の人とし、更には「一切か、無か」の排中律の精神を以って出家させ、イエスの呼び声に応えさせたのであった（一４）。だが作者が主人公を不動の「ロシアの小僧っ子」となるまでに成熟させ、やがてゾシマ長老の遺訓を継いで「実行的な愛」を生きる「生涯変わることなき戦士」（七４）として世に立たせるまでに、彼に歩ませる道は険しく、また限りなく長いものと考えられる。主人公のこの成長史、「実行的な愛」の完成に向けて置かれる試練の一つ、それが「悪魔」の存在と考えるべきであろう。

この「悪魔」という角度から見る時、我々は作者ドストエフスキイが「天使」たるアリョーシャを、様々な場面で様々な悪魔たちの前に曝していることに気づかされる ―― イワンが語る「大審問官」の劇詩。ここでアリョーシャは、荒野におけるイエスの「悪魔の誘惑」と正面から対峙させられる（五５、第３章2）。また公判前夜、自らの内なる悪魔との対決によって錯乱状態に陥ったイワンを必死で宥め、鎮めるのもアリョーシャである（十一１０）。先に見たように、その直後の神への祈りにおいて、兄イワンに取り憑いた悪魔に対する神の最終的な勝利を確信したアリョーシャが、これとは対照的に言い表すもう一人の兄スメルジャコフとは、「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼす」に至った悲劇の人である。この「信じていないもの」という言葉でアリョーシャが意味するものとは、悪魔以外の何ものでもないだろう（十一１０）。アリョーシャの冷徹で厳しいリアリズムは、二人の兄に取り憑く悪魔を的確に捉えていたのだ。また長兄ドミートリイから彼は、人間の心とは「美」を挟んで神と悪魔と

が争う戦場であると説かれ、自らの内に激しく動き始めた「カラマーゾフの血」への不安と懼れを掻き立てられる（三３）。更にまた修道院において、彼の師ゾシマ長老に敵対する修道僧はフェラポントであるが、この苦行修道僧が見る奇怪な幻影や悪魔たちは、人の心を震撼させる強烈なリアリティで迫るものがある。アリョーシャは修道院のこの現実にも触れていたのだ

神への信と愛の人アリョーシャにとって、悪魔は決して無縁な存在ではない。イワンと同じく、彼が究極の「肯定」に至る過程で、それは対決の不可避な「否定の精神」として立ち現われ、この上なくリアルな存在であり続けるのであろう。我々はアリョーシャを既に完成された「実行的な愛」の人として捉えるのではなく、「肯定と否定」の激しい振幅の中で悪魔とも正面から対峙し、神とイエス・キリストへの信と愛を貫き完成すべく闘う「ロシアの小僧っ子」として捉えるべきであろう。

ドストエフスキイのリアリズムが刻むアリョーシャの魂のこの振幅と奥行きを確認した上で、我々はイリューシンとその罪意識を見つめる彼の許に戻ることにしよう。ここに大きな問題が残されているのだ。

アリョーシャが見つめる二人の罪人、イリューシンとスメルジャコフ

悪魔について言及したアリョーシャ。繰返しとなるが、この時彼が見据えていたのは、コーリャを捕らえた「自尊心」の姿を取って現れた悪魔だけではなく、イリューシン少年を捕らえた悪魔、彼をジューチカ事件に追いやった悪魔性でもあったと考えるべきであろう。更に言えば、この時アリョーシャの視野の内には、イリューシン少年と共にスメルジャコフも捕らえられていたと考えるべきであろう。スメルジャコフこそ「ジューチカ事件」の「教唆犯」であり「共犯者」、否、「主犯」だったのだ。イリューシンとスメルジャコフ。これら二人の「罪なくして涙する幼な子」たちは、共に運命の理不尽さと醜悪さに対する怒りと呪いから魂を悪魔に譲り渡し、運命への復讐を「一線の踏み越え」によって遂行してしまったのだ。前者は「ジューチカ殺し」という形で、後者は「ジューチカ殺し」に続いて「父親殺し」という形で。アリョーシャが向き合っていたのは、これら悪魔に捕らえられた二人の罪人であり、その罪に対する「悪業への懲罰」に苦しむ青年と少年だったのだ。悪魔たちの前で「大声で」神を罵るという神聖冒涜の夢を見るアリョーシャ。彼がこの自らの姿を、悪魔たちの前でジューチカにピン入りのパンを呑み込ませるイリューシンとスメルジャコフの姿と重ねていたとしても何らおかしくはない。

かくして「罪なくして涙する幼な子」の問題は、その「幼な子」たち自身の悪魔性と根源的罪性と、それに対する赦しの問題という複雑かつ深刻な普遍的相貌を帯びて立ち現れてくる。スメルジャコフの罪と赦しの問題、その死を超えた「永遠の生命」については、最終回の第６章で改めて考えることにしよう。今回焦点を絞るのは、イリューシンの罪意識とそれに寄り添うアリョーシャの姿である。

罪と赦し、その sine qua non［シネ・クワ・ノン、不可欠の絶対条件］

アリョーシャは果たしてこの問題を解いたのであろうか？ そうだとすれば、如何にして？ —— この問いに対する答えを示す具体的な場面も言葉も作品中に直接は見当たらないように思われる。コーリャが試みた復活劇、イリューシンを罪意識の地獄から救い出そうとする試みは、先に見たように、一瞬イリューシンを歓喜で打ち震わせはしたものの、彼を救うどころか、むしろその罪意識を一層掻き立て、死期を早めさせてしまっただけであったと考えられる。コーリャに対して、悪魔が忍び込んだ「自尊心」の危険性を、見事に指摘したアリョーシャ自身はどうか。彼もまた、イリューシンを罪意識の底から救い出すような答えを見出すことは出来ず、日々少年たちとイリューシンの傍らに寄り添い続けていただけのように見える。先にも見たように、「死の床」にあるイリューシンが父親に向かい、涙ながらに三度も発した言葉。「パパ、僕が病気になったのはね、僕があの時ジューチカを殺したからなんだよ、神様が罰を下したからなんだよ」。この言葉を前にアリョーシャは少年の傍らに、なす術もなく寄り添っていただけだったように思われるのである。

だがそうであろうか？ ドストエフスキイはただこの事実、つまりアリョーシャをして少年たち一人ひとりをイリューシンと和解させ、この少年たちと共に日々イリューシンの許を訪れさせ、彼の傍らに寄り添い続けさせるという事実の内に、この問題に対する答えを提示しているのではないだろうか。『罪と罰』におけるマルメラードフ復活の描写以来、ドストエフスキイが我々に示す罪人の救いとは、決して天使たちの輝かしい登場とか、天来の妙なる声やラッパの天を裂くような轟きとか、死せる肉体の聖なる変貌とかいう、華々しい奇跡的場面の描写を以って提示されることはなく、ただ二つのことを絶対条件とするリアリズムによって描かれてきたと言えよう —— まずは当事者の内なる痛切な罪意識の存在と、その罪人に寄り添う人間の内に燃える愛、これら二つである。これら二つを sine qua non［シネ・クワ・ノン、不可欠の絶対条件］として、ドストエフスキイは罪に沈んだ人間の復活を、日常の平凡な詳細の中にいつの間にか差し込む一条の光として、または彼らが流す涙や血の上に映し出される微光として表現してきたのである（拙著『罪と罰における復活 — ドストエフスキイと聖書 —』（2007、河合文化教育研究所）。論考「『罪と罰』論を書き終えて —「個人的な体験」、そして「復活」の問題 —」（2009、雑誌「ドストエーフスキイ広場」Ｎｏ.18、ドストエーフスキイの会）を参照）。イリューシンの場合にもドストエフスキイは、アリョーシャたちがイリューシン少年の許を日々訪れ、その「死の床」に寄り添い続けるという単純な事実の内に、これら二つの絶対条件を描き込んでいると考えられる。イリューシンの痛切な罪意識と、彼に寄り添うアリョーシャや少年たちの愛である。ドストエフスキイはこの単純な事実こそが、ゾシマ長老がアリョーシャに託した「実行的な愛」の行為そのものであり、「一本の葱」の授受による「永遠の生命」獲得に繋がる途に他ならないと考えたのであろう。

「ガリラヤのカナ」の祝宴において、ゾシマ長老がアリョーシャに語りかけた言葉を確認しておこう。

「・・・我らの仕事はどうなっている？ もの静かでおとなしい私の少年よ、お前も今日餓(かつ)えた女に一本の葱を与えることが出来た。始めるのだ、倅よ、自分の仕事を始めるのだ。おとなしい少年よ！ 我らの太陽が見えるか、お前にはあのお方が見えるか？」(七４)

長老の言う「一本の葱」。それはこの日、グルーシェニカとアリョーシャとの間で交わされ、二人を絶望の底から救い上げたものであった。その「一本の葱」をアリョーシャは、日々少年たちと共にスネギリョフ家を訪れ、「死の床」に沈んだイリューシンの傍らに寄り添い続けることで与えたのだ。この少年に指を噛み砕かれた時、穏やかな眼差しでアリョーシャは語りかけたのであった。「さあ、これで十分だね？」(本章1)。彼がイリューシンに与えた最初の「一本の葱」がこの言葉であり、その後も彼は少年たちと共にこの「一本の葱」をイリューシンの許に運び続けたのだ。

イリューシン少年に寄り添うアリョーシャ、このアリョーシャに「一本の葱」を託したのはゾシマ長老であり、また長老に直接「一本の葱」を託したのは兄のマルケルであり、その遥か遠くの出発点には「ガリラヤのカナ」の祝宴の中心に座す「我らの太陽」イエスの存在がある。ドストエフスキイは、これら「一本の葱」を伝える人々の心の内に燃えるのは愛であり、それは「我らの太陽」イエスが十字架上から発する炎に由来するものであることを、「ガリラヤのカナ」において指し示したのだ。この炎が、アリョーシャや少年たちを介して、痛切な罪意識に沈むイリューシンに伝えられたと考える時に初めて、我々はこの少年を、痛ましい死を超えた「永遠の生命」の視野の内に捕らえることが可能となるであろう。

『カラマーゾフの兄弟』の最後に置かれたアリョーシャの「告別説教」。これは何よりもまずは人間にとって、何が死を超えた「素晴らしい永遠の思い出」となるのかについて、この青年が自分と共にイリューシンの死を看取った少年たちに贈る励ましの言葉だと言えよう。そしてその更に背後には、「死の床」にあるイワンと、監獄にあるドミートリイと、そして自ら「命を絶滅させた」スメルジャコフ、これら不幸な兄弟たちに対する、アリョーシャの痛恨の思いが存在するとも考えられる。同時にこれはゾシマ長老が指し示す「我らの太陽」を向こうに置いて、新たな旅に乗り出すアリョーシャが自らに言い聞かせる訓戒(いましめ)の言葉、あるいは自らが携えるべき旅の杖でもあると考えられる。最後にこの「告別説教」が持つ意味と奥行きについて検討をし、本章を終えることにしよう。

6.アリョーシャの告別説教　―死からの復活の条件―

別れの言葉

『カラマーゾフの兄弟』前篇の終局（エピローグ３）。イリューシン少年の葬儀と埋葬の後、町外れのあの「大きな石」の前に立ったアリョーシャは、十二人ほどの少年たちに対し、まず二人の兄の不幸について、そして自らの長い不在・別離について告げる。続いて彼は亡きイリューシン少年に言及し、全員がこの少年との交流を「素晴らしい永遠の思い出」として心に留めておくことを、そしてそのことで末永く互いに「友」としての結びつきを保ち続けることを訴える。これを受けて、コーリャが先頭を切って上げるのは「カラマーゾフ、万歳（ウラー）！」の叫びだ。読者の誰もが胸を打たれずにはいない感動的な終局である。

だが我々はアリョーシャの別れの言葉を、その背後にある様々な事実と問題を捨象して、ただ単に幼時期の美しい幸福な思い出が人間にとって不可欠であるという、あるいは人間の成長における家庭の重要性の宣揚という、センチメンタルで型に嵌まった道徳主義的な方向にのみ受け取ってはならないであろう。また少年たちの数が「十二」であることから、イリューシンが愛した「大きな石」の前に立つアリョーシャをイエスとみなし、彼が少年たちに語りかける別れの言葉を、イエスの十二弟子に対する「告別説教」（ヨハネ十三 31-十四 31 / 十五-十六）であると取ったとしても、これだけではただ単に『カラマーゾフの兄弟』と聖書との対応を指摘するという、表面的な受け取り方の域を出ないであろう。注意すべきは、人間にとって何が「素晴らしい永遠の思い出」となるのか、筆者がこの問題について語り出す直前、アリョーシャの「魂の内で、何か激震が走ったかのようだった」と記すことである。この「激震」、青年の胸を激しく揺さぶったものを理解しない限り、彼の別れの言葉は我々の胸にただ虚ろに美しく響くだけであろう。

「大きな石」の前での「激震」

アリョーシャの別れの言葉を検討するにあたり、まず注意を払う必要があるのは、彼がこの「告別説教」を前以って用意してはいなかったという事実である。イリューシンの葬儀と埋葬とが終わり、晩の追善供養までの間、残された家族が心ゆくまで悲しみに浸れるようにと、アリョーシャと少年たちは外に出る。そして以前イリューシンとスネギリョフ父子が散歩をしていた小径を歩いていた時のことである。彼らが町外れの放牧場を区切る生垣の傍らにある「大きな石」の前に行き当たるや、スムーロフ少年が叫び声を上げる。「イリューシンの石だよ。［父親のスネギリョフが彼を］葬ってあげたいと言っていた石だよ！」。筆者は、この石を見つめるアリョーシャについて、次のように記す。

> 「全員が無言のまま、この大きな石のところで立ち止まった。アリョーシャは石に目をやった。するといつかスネギリョフが語ったことの全光景が、一挙に彼の記憶に甦ってくるのであった。つまりイリューシンが泣きながら父親に抱きつき、「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」、こう叫んだ時の光景である。彼の魂の内で、何か激震が走ったかのようだった。彼は真剣で厳粛な眼差しで、イリューシンの同僚である小学生たちの可愛らしく明るい顔の全てに

目をやり、突然彼らにこう語りかけたのである。「皆さん、僕は皆さんにここで、正にこの場所で、一言お話をしたいと思います」（エピローグ３）

「彼の魂の内で、何か激震が走ったかのようだった」。筆者が用いた「激震が走る（サトリャサッツァ）」という動詞の根にある「激震（トリャスチー）」とは、「激しく揺さぶること」「激しく震え動かすこと」という意味の名詞で、ここに具体例は挙げないが、ロシア語ではこれを語根として様々な激しい動詞が作られ、それらは『カラマーゾフの兄弟』において最も特徴的な語群を形成するものである。先に挙げた「激情の噴出（ナドルイフ）」と同じく（本章3 3）、また最終回の第６章（2・3）で検討する「絶滅させる（イストレブリャーチ）」と同じく、この「激震」という一語によって主人公たちの魂の動揺や震撼や激変が指し示され、新たな絶望と覚醒に向けた激しいドラマが展開してゆくのである。

「イリューシンの石」の前に立ち、アリョーシャの魂の中で起こった「激震」――「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」。少年の叫びにある「あいつ」とは、「垢すりへちま事件」の張本人ドミートリイに他ならない。アリョーシャの内にはこの時、改めて兄ドミートリイの恥ずべき振る舞いが甦り、彼の魂は激しい痛みに刺し貫かれたのだ。アリョーシャの「告別説教」を導き出したのはこの少年の叫びであり、それは少年の死後もなお彼の胸を突き刺し、激しく震わせる痛みだったのだ。イリューシンが葬られた今、そして父スネギリョフと家族全員が悲しみの底に突き落とされている今、「あいつ」ドミートリイはこの悲しみを何処で、そしてまた如何に受け止めているのか。

この場面に先立ち筆者が記すのは、カチェリーナ訪問に続き、囚人病棟のドミートリイの許を訪れたアリョーシャについてである（エピローグ１・２）。二ヶ月前、父親殺害後の恐怖（パニック）により、真正の癲癇発作に襲われたスメルジャコフが入れられていた小さな病室。ここでつい先に繰り広げられた修羅場、ドミートリイとカチェリーナとグルーシェニカとの愛と嫉妬の一幕については省略しよう。我々が目を向けるべきはこの時、兄ドミートリイに対してアリョーシャが下した厳しい宣告である。ドミートリイは懲役二十年の流刑を宣告され、シベリヤ送りがいよいよ現実のものとなるや、既に始まった看守の「貴様呼ばわり」に耐えられず、イワンが密かに謀った護送途上での脱走と、グルーシェニカを伴ったアメリカ逃亡のことを口にし始めていた。この兄にアリョーシャは宣告を下したのである。

「兄さんには、心の用意が出来ていません。十字架を負うことはまだ無理です」
（エピローグ２）

スメルジャコフの自死を見て見ぬふりをして立ち去ってしまったのはイワンであった。このスメルジャコフに対して、ドミートリイが一貫して示すのもまた軽蔑でしかなかった。同じくドミートリイがスネギリョフに対して示すのも、時に自らの振る舞いに対する後悔の情を口にするとはいえ、基本的には無関心でしかない。更にまたドミートリイは、自分

に追いすがって泣きながら、必死で父の赦しを請うたイリューシンが受けた心の傷について、そしてこの少年の「死の床」の傍らにアリョーシャや少年たちが寄り添い続けたことについて、更にはまたこの少年が傷心の内に迎えた痛ましい死についても、些かでも関心を示した形跡はないのだ。

「十字架を負うことはまだ無理です」。このアリョーシャの宣告とは、直接は「父親殺し」の冤罪という大きな重荷を担う意思も力もない兄に対する、冷静な観察（リアリズム）と配慮からなされた宣告であったと言えよう。だがそれは同時に、世に満ちる不幸な「餓鬼」たちのために十字架を負って生きることを熱く宣言しながら（第５章4・5、次回「研究会便り（１２）」）、目の前の不幸な人々には一切関心を示さない「若旦那」ドミートリイ、自らが犯した「罪」に対する自覚さえ持たない「卑劣漢」ドミートリイを、アリョーシャが改めてイエスの十字架の前に引き据え、彼に対して下した宣告でもあったのだ。ジューチカの復活劇を仕組んだ少年コーリャに対する厳しい言葉に次いで、これは他人を批判することも裁くこともまずしない「天使」アリョーシャが下した、恐らくは最も厳しく冷徹な宣告と言うべきものであろう。「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう！」。死の向こうに去った少年のこの叫びは、アリョーシャの内で止むことなく鳴り響き、彼の魂を突き刺し突けていたのだ。この延長線上に生じたのが「イリューシンの石」の前での魂の「激震」であり、これがアリョーシャを石の前に進み出させ、「告別説教」を促したと考えるべきであろう。ドミートリイの光と闇については、次回第５章で改めて考えよう。またアリョーシャの冷徹で的確なリアリズムについては次回でも、また最終回でも中心テーマの一つとして扱おう。

アリョーシャの心に「激震」を走らせたのはイリューシン少年の叫びであり、この叫びによって甦らされた兄ドミートリイの恥ずべき振る舞いであった。だが我々は、他の二人の兄スメルジャコフとイワンもまた、アリョーシャの胸を痛みで疼かせ続ける存在であったことを忘れてはならないであろう。このことについても考えておかねばならない。

スメルジャコフについてはどうだろう。アリョーシャは葬儀の前、コーリャの問いに答えて、父親を殺したのは裁判で有罪とされたドミートリイではなく、下男のスメルジャコフだったのだと明白に告げている。但し彼はこのことを「事実」として語るだけであり、それ以上は何も語らない。そもそも少年コーリャの関心が向かうのは、今は専ら「父親殺し」で有罪判決を受けた直後のドミートリイであり、「真実のために己を犠牲にした」ドミートリイとその受難の英雄性なのだ。「悪戯心」と好奇心の塊のようなこの少年が、その心をスメルジャコフに対して、殊に彼の自殺という衝撃的な事件に対してまで振り向けることがなかったのは、アリョーシャにとっては幸いなことだったと言うべきであろう。イリューシンの葬儀とその後の「告別説教」の時点では、アリョーシャにとって兄スメルジャコフとは、前回の終わりに見た彼の「祈り」で確認したように、「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼした」不幸な兄として捉えられていたと考えてよいだろう。だがアリョーシャがこれで亡きスメルジャコフ

については心の整理をして片づけてしまったと考えるとしたら、それは大きな誤りであろう。忘れてならないことは、アリョーシャが編集する「ゾシマ伝」だ。その編集の時期や内容等については第６章で詳しく考察しよう。ここで思い起こすべきは、この「ゾシマ伝」の最終章で、アリョーシャがこの亡き兄の生と死について、殊にその自殺について、師ゾシマの自殺者論と重ねて考察し、その死を超えた「永遠の生命」について記すという事実である。アリョーシャは亡きスメルジャコフへのいわば「鎮魂歌」を捧げるのだ。彼の内で、亡き兄の思い出は忘れ去られるどころか、疼き続けていたのである。

イワンについてはどうであろう。注意すべきことにアリョーシャは、「告別説教」の冒頭で少年たちに向かい、兄ドミートリイが流刑に処されること、もう一人の兄イワンが「死の床」にあること、そして自分はこの町を去り、非常に長い間少年たちと別れることになると告げている。しかしこれらもまた、兄たちに関するごく短い事実報告でしかない。イワンについてアリョーシャは、この兄が今は「死の床」に付いているものの、その「祈り」が示すように（「彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服しようとしていたのだ」「神様が勝つのだ！」）、やがて「真実の光の中に起ち上がる」こと、そして神の光の内に呼び出されることを確信していたのである。

ドミートリイ、スメルジャコフ、そしてイワン。これら三人の兄たちの罪と不幸について、「真実」を詳細に語り聞かせるには、少年たちはまだ余りにも幼く、またアリョーシャの心はなお余りにも痛み続けていたと考えるべきであろう。またこの時のアリョーシャは少年たちに、三人の兄たちの心の「闇」について語るよりは、彼らの心を「素晴らしい永遠の思い出」と共に、まずは「光」に向かわせたかったと考えるべきであろう。

以上のことを踏まえ、「告別説教」においてアリョーシャは何を語ったのか考えてみよう。

痛みに寄り添う愛の一体感

「イリューシンの石」の傍らで「突然」アリョーシャが語り出した「告別説教」。アリョーシャの言葉に耳を傾けてみよう。

> 「皆さん、このイリューシンの石の傍らで、僕たちはまずイリューシンのことを、次にお互いに皆のことを、決して忘れないと約束をしましょう。これからの人生で僕たちの身にたとえ何が起ころうとも、たとえこれから二十年も会えないとしても、僕たちは一人の気の毒な少年を葬ったことを忘れないようにしましょう。覚えているでしょう。この少年はかつて、あの橋のたもとで石を投げられていたのに、その後では皆さんにこんなにも愛されたのです。立派な少年でした。親切で勇敢な少年でした。父親の名誉と辛い恥辱を感じ取り、そのために立ち上がったのでした」（エピローグ３）

> 「そんなわけで、皆さん、何よりもまず、僕らの生涯全てを通して、彼のことを憶

えていましょう。そしてたとえ僕らがこの上なく重大な仕事で忙しくとも、栄誉を勝ち得たとしても、あるいはどんなに大きな不幸に陥ったとしても、それでも今後次のことを決して忘れてはいけません —— かつてここで、僕たちはみんな一緒に、立派で善良な感情で結ばれ、素晴らしい時を過ごしたということ。そしてこの感情が、僕たちが気の毒な少年に愛を寄せている間に、僕たちを実際の僕たち以上に優れた人間にしてくれたということを」（同上）

アリョーシャは少年たちに、イリューシンのことをただ記憶に留めて置くようにと訴えているのではない。彼が強調するのは、少年たちが「気の毒な」イリューシン少年に「愛を寄せていた」こと、このことのかけがえのなさである。そしてこの「気の毒な」イリューシン少年に「愛を寄せていた」時とは、アリョーシャによれば、たとえそれがイリューシン本人にとってもまた皆にとっても、少年の不幸と痛み自体を消し去ることには繋がらなかったとしても、全員が愛による一体感で結ばれた時だったのだ。そしてこの痛みに寄り添う愛の一体感こそ、やがて彼らに自らが「立派で善良」であり、「実際以上に優れた人間」であったことを自覚させ、ひいては彼らの内にイリューシンの「永遠の思い出」を脈打たせ続ける源泉となるであろう —— これはアリョーシャによる新たな「実行的な愛」の定義そのものであり、また少年たちの未来に向けて発せられた「実行的な愛」の勧め、言い換えれば、罪と死を超えた「永遠の生命」が与えられる絶対条件の提示に他ならない。

十字架上のイエスからゾシマ長老へ。ゾシマ長老からアリョーシャへ。そしアリョーシャから少年たちへ。死を超えた「永遠の生命」を可能とする「実行的な愛」のバトンの受け渡しが、ここに新たになされたのである。この意味でアリョーシャの別れの言葉とは、ヨハネ福音書が伝えるイエスの「告別説教」（ヨハネ十三-十七）における「愛の勧告」（同十四 15-31）とそのまま重なるものと言えるであろう。

「復活」の sine qua non［シネ・クワ・ノン］

さてドストエフスキイが提示する死を超えた「永遠の生命」、罪の赦しと「復活」が可能とされる絶対条件について、ここで改めて確認しておこう。先に確認したように（5）、我々は『罪と罰』以来ドストエフスキイが描いてきた「復活」の絶対条件、sine qua non とは、まずは当事者たる人間の内なる痛切な罪意識と、その罪人に寄り添う人間の内に燃える愛、これら二つの存在であると考えた。この条件が存在して初めて、ドストエフスキイ世界においては、日常の何気ない詳細の内に「永遠の相」が映し出され、死を超えた「永遠の生命」の曙光が微かながらも輝き出すのである。

この視野の下にもう一度確認をしておくべきことは、「父親の名誉と辛い侮辱」のために命懸けで立ち上がった「あの気の毒な少年」イリューシンとは、ジューチカにピンを呑み込ませて死に追いやってしまったという深甚な罪意識に苦しむイリューシンでもあったという事実である。つまり「垢すりへちま事件」の被害者であるイリューシンは、その前に

「ジューチカ事件」においては残酷な加害者であり、この少年の心の中では「垢すりへちま事件」の悲しみの更に奥で、また更に痛切に、「ジューチカ事件」についての罪意識が疼き続けていたと考えられる。その延長線上で、コーリャにペン・ナイフを突き刺してしまった事件も、彼の内では疼き続けていたに違いない。「死の床」にあるイリューシンにおける悲劇性と悪魔性を忘れてはならない。

「垢すりへちま事件」によって魂を震撼させられたアリョーシャが、同時にこの「ジューチカ事件」についても思いを馳せ、イリューシン少年が内に抱える苦しみについて心を痛めていなかったと考えることは不可能である。先に見たように、リーザと同じく自らも悪魔たちを前にして「大声で」神の悪口を叫ぶ夢さえ見ていたアリョーシャは、イリューシンを捕らえた悪魔をも見据え、その罪意識の地獄を理解し、それゆえにこそ日々少年たちと共にイリューシンの許を訪れ、その「死の床」に寄り添い続けていたと考えるべきであろう。そしてこのことが、彼に出来る唯一の「実行的な愛」の実践でもあったのだ。そしてここには既に、ドストエフスキイ世界における復活の絶対条件は十分に満たされていたのだ。

アリョーシャは「イリューシンの石」の前において、「ジューチカ事件」について言及することはない。彼の前に立つ少年たちもまた、この事件について何も語らない。彼らも一時は「垢すりへちま」と囃し立ててイリューシンを嘲笑し、また石を投げて虐めるという残酷さに酔う存在、悪魔に心を譲り渡した「あいつ」たちだったのだ。たがアリョーシャは、この小悪魔たる少年たちを既に一人ひとりイリューシンと和解させていたのである。そして彼らは少年の痛みを自らの痛みとし、「気の毒な少年に愛を傾け」、その死に至るまで寄り添い続けたのだ。先に見たように、アリョーシャにとっては、「気の毒な」イリューシンに寄り添い続けたこの級友たちの存在と愛の一体感こそが、イリューシンがその罪意識の地獄から解き放たれ、死を超えた「永遠の生命」の内に摂取されることを可能とするに必要な絶対条件、sine qua non だったのである。

アリョーシャが語る「思い出」の永遠性とは、罪意識に沈む「あの気の毒な少年に愛を傾け」、少年たち全員が痛みの中で一つになったところ、つまり皆が共にそれぞれの十字架の苦しみを担ったところに差し込む「光」の感覚だったと言えよう。既に彼らが体験したこの「光」を前にして、アリョーシャが今更「闇」について、つまり自らと兄たちを捉えた悪魔について、そして少年たちの心を一時捕らえた悪魔について、またイリューシンの心を苦しめ続けた悪魔について、果たして言及する必要があったであろうか。我々がここに置くべきは、ヨハネ福音書冒頭近くの次の言葉であろう。「光(ひかり)は暗黒(くらき)に照(て)る」(ヨハネ一5)。ヨハネにとって、光は既に今、輝いているのだ。

コーリャの「復活」への展望

アリョーシャによって指し示された「光」の感覚の中で、感動の涙と共にコーリャが叫ぶ。

「僕らは皆、死の世界から起ち上がり、復活して、互いに皆と、イリューシェチカとも再会できると宗教は言いますが、本当でしょうか？」（エピローグ３）

イリューシンのためにジューチカをペレズヴォンに生まれ変わらせるという、あの微笑ましくも罪深い復活劇を仕組んだ少年コーリャの、このあたりが「復活」についての、また宗教的リアリティについての実際の認識であろう。彼には未だ確かなことは何も分かってはいないのだ。だがアリョーシャはこの未熟な愛すべき少年に対して丁寧に、しかも真正面から真摯な答えを返してやる。

「必ず復活しますとも。必ず再会して、皆がそれまでのことをお互いに楽しく、喜ばしく語り合うのです」（同上）

感激したコーリャと、これに和した少年たちの「カラマーゾフ、万歳！」の叫びを以って作品の前篇は終わる。恐らく生命力と知力に満ち溢れた未完成体の少年コーリャは、書かれずに終わった後篇において、アリョーシャと他の少年たちとの交流の中で、なおその「素晴らしい天性」と「若い心に芽生える芸術的欲求」とを起動力として、「悪戯心」と「芝居心」に満ちた大きな悲劇的物語を紡ぎ、その絶望と苦しみと悲しみの中から彼自身の新たな「復活劇」を紡ぎ、彼を待つ「光」と出会うのであろう。

取り敢えずは我々も「告別説教」の内に含まれた問題を幾つか浮き彫りにし、人間にとって何が「素晴らしい永遠の思い出」となるかについて、アリョーシャに即して二つの絶対条件、sine qua non を確認したところで本章を終えることにしよう。

（第４章　了）

２０１８年5月
２０１８年１２月一部加筆修正

次回、第5章、研究会便り(12)について

『カラマーゾフの兄弟』とは「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちが、「父親殺し」を挟んで繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマであることがはっきりと浮かび上がってきました。次回は、カラマーゾフ家の長男であり、圧倒的な情熱と生命力を以って生きるドミートリイに焦点を絞ります。

人間の心とは美を巡り悪魔と神が戦う戦場だと語り、女性の美を命賭けで求めるこの青年のドラマを追ってゆく中で我々が突き当たるのは、その浪漫的詩的心情の高揚の一方で、彼の内に広がる荒涼索莫たる「裸形の曠野」です。この青年もまたその抱える問題の点で、スメルジャコフやイワンやアリョーシャのそれとも深く通底し合う存在なのです。

つまり彼の歩む道もまた、イエス・キリストと神理解に向けた「ロシアの小僧っ子」の道程であり、作者ドストエフスキイはこのドミートリイをも、他の兄弟たちと同じく「絞首台への道」と「十字架への道」の前に立たせ、絶えざる試行錯誤の試練を与え、しかもその内には深い原罪性の浄化・聖化という課題を抱える人間として描いていることが確認されるでしょう。

このドミートリイを追うことの中から、彼とスメルジャコフとの関係を浮かび上がらせ、我々が第一の課題としているスメルジャコフの十全な理解のためにも、一つの手掛かりを得たいと思います。